

# 針葉樹会報

第 138 号  
2017 年 4 月



## 目 次

表紙写真＝赤岳（赤岳鉱泉から）	2014年3月	撮影・岡田健志
編集後記		
「さゝだ！」		加地 幸雄
学生の活動		
会務報告		
三月会通信		
40	38 36 33	32
懇親山行	岐ヶ丸	（岐ヶ丸） （蘿釣山） （高指山） （平野）
懇親山行延長山行		中村 雅明
2016年9月	キリマンジヤロ最高峰 ウフル・ピーグ登頂	佐藤 久尚
キリマンジヤロ紀行付記		岡田 健志
キリマンジヤロ登山の高山病について		岡田 健志
キリマンジヤロ登山の会計報告		岡田 健志
懇親山行	岐ヶ丸	佐藤 健志
懇親山行延長山行	（岐ヶ丸） （蘿釣山） （高指山） （平野）	中村 雅明
25	29 28 27	25
2016年9月	キリマンジヤロ紀行 ダイアモックスと高山病について 佐藤 健志	岡田 健志
キリマンジヤロ登山の会計報告		岡田 健志
懇親山行	岐ヶ丸	佐藤 健志
懇親山行延長山行	（岐ヶ丸） （蘿釣山） （高指山） （平野）	中村 雅明
25	16 12 8 7 6 3	2
大学山岳部リーダー冬山研修会		井草 長雄
懇親山行		齊藤 肇誠
越後・会津シリーズ 第10弾		小野 周一
博士山、志津倉山		前神 隆
リハビリ登山――博士山――		佐藤 直樹
志津倉山		岡田 健志
キャンピングカー珍道中記		神野 肇誠
南ア・荒川三山（赤石岳）		齊藤 長雄
2016年9月	キリマンジヤロ紀行	井草 長雄
キリマンジヤロ最高峰 ウフル・ピーグ登頂		齊藤 肇誠
2016年9月	キリマンジヤロ紀行付記 ダイアモックスと高山病について 佐藤 健志	井草 長雄
キリマンジヤロ登山の会計報告		齊藤 肇誠
懇親山行	岐ヶ丸	井草 長雄
懇親山行延長山行	（岐ヶ丸） （蘿釣山） （高指山） （平野）	井草 長雄

発行日	2017年4月20日	編集人	岡田 健志
発行者	針葉樹会 (会長 小島和人)	〒248-0022	
印刷所	ヤマノ印刷㈱	鎌倉市常盤 937-53	会報幹事／岡田健志、井草長雄 川名真理

# 私の思い出の一葉

井草 長雄（昭48年卒）

## 大学山岳部リーダー冬山研修会

一九七〇年は、私の山岳部歴の中でいちばん記憶に残る年となつた。まず六月にOBの平川紀男さんが前穂で遭難した救援に駆けつけ、初めて遭難事故というものを身近に体験した。そして九月には山岳部同期の橋本明君が甲斐駒ヶ岳赤石沢でロツククライミング中に遭難死した。

遭難やら部員の減少やらで、部としての力量は見る間に低下してしまつた。で、どういう経緯だったか忘れたが、文部省の大学山岳部リーダー冬山研修会があるから参加してみてはどうかという話になり、私と羽部敏夫君が行くことになつた。この冬山研修会はたしか第一回目の募集だつたようだ。

そして11月23日、全国から六〇人ほどのリーダー候補生が出来て間もない立山・芦嶺寺の国立登山研修所に集まつて一テントごとにグループ分けされた。私大の名だたる山岳部あたりから来ている連中は上背のあるガタイのいい猛者が多かつたが、幸い私の配属されたテントは国公立大学の小柄な連中ばかりだつた。

三日目、弥陀ヶ原から室堂あたりまで重いザックを背負つて雪道を歩き、やれやれとテントの中でくつろいでいるとき、わがグループのM大OBの講師が「三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊本部で割腹自決した」との衝撃的なニュースを伝えてくれた。

それはともかく、四日目はそれまでの快晴が打つて変わって猛吹雪となつた。自分のスキー板の先端が見えないほどのホワイトアートで、見え隠れする前の奴の影を見失わないよう必死にくつづいて行く有り様だつた。天狗平からは吹雪が止んで霧となり、弥陀ヶ原に着いたときにはずぶ濡れだつた。

それでもなんとか全員無事、研修所に戻り、その夜は講師が差し入れてくれたサントリーレッドを二本も空にしてテント仲間と大いに論じ歌い楽しんだ。たつた五日間の研修で、ちゃんとリーダーが養成できたのかどうか心許ないけれども「井の中の蛙」にならない体験にはなつたかもしれない。

ちなみに、同じ頃、同志社大学山岳スキーチームの11人が天狗平で猛吹雪に遭つてちりぢりになり、7人が行方不明になつて翌年春まで発見されなかつた。



吹雪の中、天狗平と弥陀ヶ原の間で立ったまま弁当をとる。  
人物は金沢経済大と神戸商船大のテント仲間。1970年11月26日

## 懇親山行

### 越後・会津シリーズ 第10弾

期間：2016年10月21日～23日

参加者：佐薙、上原、本間、小島、小野、岡

田、中村（雅）、宮武、加藤（博）、前神、  
佐藤（周）、齋藤（誠）

三井さん（昭和37年卒）が始められた、懇親山行・越後シリーズ第9弾が2015年6月に妙高山で開催された。三井さんは体調を崩され不参加だったが、『地元』幹事の加藤博行さん（昭和51年卒）が完璧な幹事を務められた。雨中12時間行動はのちに「渾身」山行と言われたものだった。（針葉樹会報第134号参照）

この山行に遠く会津の地から馳せ参じたのが、福島県庁に勤務する齋藤誠さん（昭和63年卒）であった。

郷土愛に燃える齋藤さん、自ら地元幹事に立候補し、我が針葉樹会の懇親山行を福島県で開催し、会員を会津に呼び込もうと計画、そこから「懇親山行 越後・会津シリーズ」

という呼び名が生まれ、今年はその第10弾ということになった。

以下詳細記録については、齋藤幹事から報告する。

山行幹事 岡田 健志（昭42年卒）

## 博士山、志津倉山

齋藤 誠（昭63年卒）

山、高きが故に尊からず。とかく若い時分には標高の高い日本アルプスや難易度の高い岩や雪山などに目が行きがちだったが、五十年を越えた今になつてみると、低山や『やさしい』山々にも味わいがあると実感できるようになつた。

特に生まれ育った会津の山々は地味だが豊かな植生を湛えていて魅力的だ。熊との遭遇事故の報道が後を絶たないが、そもそも熊の領域に人間が入つて行くわけだから、鳴り物やラジオなどを準備して、単独行を避けることでリスクを軽減することはできる。

今回、針葉樹会員諸氏に大挙して会津を訪れてもらう機会を得て、特に幹事の岡田さんには事前に下見までお越しいただき感謝している。東京からの距離、時間はそれ程変わら

ないのに、どうしても長野や山梨、静岡方面へ出かける『山や』が多い中、温泉や地酒、地元の観光などと組み合わせれば、会津の山々も十分に魅力的ではないかと自負しているところです。

そんな中、今回選んだ山は博士山と志津倉山。ブナの森が美しい、コンパクトだが変化に富んだ山で、滝谷川を挟んで対峙している。博士山へは西側の柳津町からの登山だが、東側の麓、会津美里町で私は生まれ、高校までの18年間を過ごし、また、将来、終の棲家となり、地域興しに関わりたいと考えている。

宿はコストパフォーマンスと使い勝手の良さから、つきみが丘町民センターを選んだ。この柳津町は4年前までの3年間、私が駐在した奥会津振興センターの管轄エリアの入り口にあたる。

戦後日本の電力を支えた只見川沿いの5町村が東から西へ、柳津町、昭和村、三島町、金山町、只見町と並んでいるが、私の事務所と宿舎は三島町にあつた。

会津という名前は『古事記』によれば、古くは『相津』と書いたという。崇神天皇の時代、諸国平定の任務を終えた四道將軍大毘古命と建沼河別命(たけぬなかわわけのみこと)

の親子が、この地で合流したことに由来する。

蘆名氏に始まる会津藩の幕末に至る歴史は余りにも有名である。

10月21日（金）大方のメンバーが宿に参集し、各自、虚空蔵尊や版画の斎藤清美術館などを訪れた後、「にしんの山椒漬け」などの会津料理で前夜祭を開催した。紅葉はもう少しという時節だったが、直近2～3日の寒気のおかげで急速に進行し、山頂付近では見頃となつた。事前の天気予報では、土日とも雨模様だったが、諸先輩の熱気で見事雨を吹き飛ばす。

22日（土）はマイクロバス出発時間の関係で7時に宿を出発、熊に注意の看板がおどろおどろしい道海泣尾根登山口から「45」に登り始めた。

上原、小島両氏は体調不良により、そのままバスに乗つて帰る。博士山に通ずるメインの登山道とは思えない急登で、道海という坊さんが泣き泣き登つたという、わかりやすい命名である。ハシゴが架けられた急登をシャクナゲ洞門を過ぎて2時間で稜線に出る。案内役の私が先導するが、途中幾度となく、キリマンジャロから帰ったばかりの岡田さんから「ボレボレ！」「ボレボレ！」の号令がかから



博士山への急登



博士山登山口にて



博士山頂上にて

る。

30分ほどの稜線歩きで社峰に着く。先に紹介した四道将軍大毘古命と建沼河別命（たけぬなかわわけのみこと）の親子の出会いの時、国家鎮護のため国土開拓の神様であるイザナギノミコト、イザナミノミコトの二神を新潟県境の御神楽岳に奉斎したのが伊佐須美神社の起源とされている。

その後、博士山、明神ヶ岳を経て欽明天皇十三年（552年）に高田南原の地に遷御し、更に同二十一年（560年）現在の宮地、東原に御神殿を造営した。その社峰があつたと

ころとされる。古を偲びながら 10:50、社峰から 20 分で山頂（1482m）に着く。  
木々が伸びていて展望は部分的だが、わがふるさとも視界に入り、会津平野の末端に位置することがわかる。しばしの休憩の後下山。途中西側に巨大な山塊、飯豊連峰を認める。



飯豊山

登りの尾根のように“超”の付く急坂ではないが、“普通に”急な下りを 2 時間強で 13:30 大谷滝尾根登山口に到着。  
時間に余裕があるので迎車のマイクロバスに交渉して、昭和村の「からむし工芸博物館」を訪ねる。からむしは、イラクサ科の多年草

で、苧麻とも言われ、纖維を青苧と呼んでい

る。からむしを原料とする上布の生産地では、越後（越後上布・小千谷縮布）や宮古（宮古上布）、石垣（八重山上布）などがあり、昭和村は本州における唯一、上布原料の产地となつていて。

夜、前神さんが合流し、2 度目の前夜祭。

23 日（日）は志津倉山へ。標高 1234m、美しいスラブとブナや栎の巨木が魅力的な変化に富んだコースを有するコンパクトな山。宿の出発は 7 時。7 時 40 分過ぎに登り始め



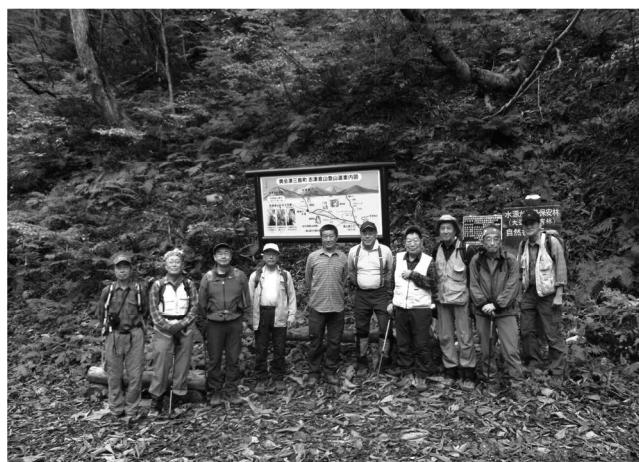
美しいスラブ

る。

スラブを右に見ながら 1 時間小沢を遡ると 昨日に引き続いての急坂を木の根や岩につかまりながら 30 分強登つて三本松へ。そこから 30 分弱で稜線。15 分程西へ進むと、志津倉山頂へ。

残念ながらガスで展望はなく、寒い。約 1 時間かけて急坂を下る。

何かと博識な佐難先輩から不明な葉っぱの 究明を命ぜられ、下山後図鑑とにらめっこし



志津倉山登山口にて

をお土産にする。

佐羅大先輩を始め、諸先輩の健脚に驚かされた2泊3日の充実した山行だった。

会津への列車によるアプローチは南部であれば浅草から東武を使って会津高原駅等へ直行できる。更に近く感じていただけるはずなので、またの来訪を心からお待ち申し上げております。



志津倉山頂にて

## リハビリ登山——博士山——

小野 肇（昭40年卒）

た。結果、ヒトツバカエデであることが判明。

最後のブナ平に出る頃から雨となり、残念ながら少し濡れてしまった。それに伴い、ガイド役の足が止まらなくなり隊が分散してしまった。反省、次回に活かします。ちょうど12時頃登山口に全員もどる。乗用車4～5台が駐車しており、追い抜かれることはなかったが中々人気の山。迎車のマイクロバスで宿に戻り、入浴後多くのメンバーは会津若松駅まで送つてもらう。名物の「あわまんじゅう」

2015年9月12日右肩脱臼、肩甲骨頭部のひび、腕神経叢麻痺の診断を受けてからリハビリに励み博士山は再起のリハビリ登山でした。

闘病記をまとめてみました。

2015年の9月、道外の友人7人を夕張岳に案内した。夕張岳は道外の岳人には人気があり5年前から登りたいと所望されていたが、林道が決壊して修復ならず延び延びになっていた。

なつていた。

2014年に林道も修復され山小屋も新しく建て直したこともあり実現した。当曰は小雨。12時過ぎに登頂、昼食後下山。13時頃左足をハイマツに引っかけ右足がすぐに前にでず右腕から転倒。ねんざでもなく骨折でもない。まさか脱臼とは…。右腕を三角巾で固定し鎮痛剤を飲んで下山。右腕使はず下山難渋する。携帯も使はず救助要請もできず空身でひたすら下山。2時間後鎮痛剤効力なくなり一歩、一歩に痛みが走る。

暗くなる前に駐車場までなんとか下り電波の届く国道まで車に乗せてもらう。救急車を呼んだが近くの病院では脱臼治す医師がない。救急車は札幌まで。車がゆれるたびに激痛走る。21時札幌厚生病院でようやく肩を入れてもらう。痛み和らぐ。

長時間外れたままのため腕の神経に麻痺が残り右指動かず、以降回復に時間がかかるってしまった。肩甲骨の頭部にひびがはいついたので脱臼が治ったのは10月27日、1ヶ月以上もかかった。

理学療法士によるリハビリが開始される。15分電気療法、15分温熱療法、30分マッサージを週5回受ける。11月14日、ベンで字が

書け、15日、はさみ使え、パソコン操作できるようになる。11月19日、夜外出。左手で料理つまみさかずきを傾ける。11月27日、左手で除雪。やはり両手でないとうまくいかない。

12月3日から作業療法士にもお世話になる。指を動かす訓練。痛い。2016年1月22日、カフスボタンつけることに成功。22日、ネクタイも締めることできる。2月26日、電気療法終了。5月9日、血液の循環よくする薬と痛み止め卒業。8月2日、理学療法士のリハビリ卒業。

9月27日から週1回のリハビリとなり、今回のお懇親山行後の10月25日でリハビリ終了。病院診察18回、リハビリは140日通った。ようやく病院から解放。博士山では無意識に右手がでて鎖や木をつかんで登っていた。登山再開できることに喜びを感じた博士山でした。

## 志津倉山

前神 直樹（昭52年卒）

秋の針葉樹会懇親山行として奥会津の博士山と志津倉山の計画が出てきたとき、日程を調べると支障無さそうで参加を表明した。両方ともこれまで聞いたことのない山名だが、福島県にいる斎藤君が計画してくれた山ならきっと面白いだろうし、そして紅葉が期待できるだろうと、思った。ただ日程が合うと言つても22日の土曜日にしか東京を出発できず、登れる山は志津倉山一つとなる。

岡田さんから宿泊場所である柳津町・つきみが岡町民センターへの行き方を事前にお聞きしていたのに従い東京駅のホームにて新幹線を待っていた。当該列車が入線して乗り込もうとしているリュックを背負った小島さんが降りてこられる、「風邪を引いたみたいで博士山は止めて帰ってきた、みんな待ってるよ」と。こんなことつてあるんだと思いつながら列車に乗り込み郡山経由会津若松へ。会津若松から只見線に乗り換えるのだが、

只見線と言うと上越線・小出から出ていることばかりが頭に浮かんで会津若松を結んでいるのはこれまで全く念頭になかった。柳津も「やなつ」ではなく「やないづ」と読むことも全く知らなかつた。要は会津と言うと会津磐梯山しか知らず、殆ど馴染みのなかつたことを改めて認識。高校生と近隣の乗客しか乗つていらない只見線で会津柳津に着いたが、駅に黄色一色の車で迎えに来てくれた斎藤君に「なんで只見線は小出行きではなく会津川口止まり？」と訊くに「2011年の大雨で鉄橋が流されて川口・只見間が不通、復旧には100億円以上の金がかかる」と。観光シーズンならいざ知らず、日常の大半の利用客が自動車に食われるのでは100億以上の金がかかる復旧はたぶん現実的ではないのだろうと感じる。

（後日、たまたま週刊誌の鉄道の風景とかいうグラビアで、川の途中で見事に切り取られた只見線の写真を見たが、自然の威力の凄まじさを改めて思い知らされた）

夕食ではいろんな話が出たが、中で最近は大学の規制で校内でのアルコールが禁止されているため部室での宴会が出来ない、山岳部にとつてある意味重要なイベントなのに残念という話から、昔の山岳部宴会で各OBがどれだけの苦労をさせられたかの話で盛り上がり

る。

翌23日（日）朝食を終えると町民センターで手配してもらったマイクロバスで出発。しかしこのマイクロバスがどこまで入るのかと思うくらい山奥に進んでゆく。会津若松に比べて柳津 자체が随分奥まったところにあると思ったが、志津倉山の登山口は奥また奥だった。

登山口には志津倉山の概念図が書かれていて斎藤君から我々は周遊コースを探るとの説明があつた。それほど高い山ではないのだが、過去遭難した人間がいたとの表示もあつたが、どうしてこの山で遭難などあるのだろう、よほどの難所があるのだろうか。

7時40分頃登山口を出発。天気は曇り。1ピツチほど行つたところで尾根の向こうにスラブ帯が見え、また雨乞岩なる岩場もあつてこれが山名に倉が付いている所以だろうか。おそらく遭難もそういう場所で起きたのだろう。しかしこの辺りの岩場から見える紅葉は見事で期待通り。あまり紅い色は見えないが、楓類が多いのだろう、黄色が空に映える。やはり紅葉の山は良いなと思う。

やがてシャクナゲ坂と言われるところを登るが「坂」どころではない急傾斜。春なればシャクナゲがおそらく綺麗なのだろうが、今

は花も何もなく、木の根っこや枝を掘んで必死になつて体を持ち上げる。上を見ると今にも人が降つてくるのではないかと思うようなところもあつた。なんとかこの「急坂」を越えると一転して普通の尾根道になり、のんびり歩いてゆくと志津倉山の頂上だつた。附近の黄金色の紅葉も見事。学生時代の山はひたすら歩を進めるだけで植物も動物も何も愛でるようなことはなかつたが、最近はそういう

周りの景色にも随分気が向くようになつてきている。

前日にみなさんが登つた博士山からは飯豊が見えたそうだが、この日は曇りで眺望はもう一つ。この辺りあまり馴染みのない地域なので付近の山ももう一つ良くわからない。のんびりと昼を食べると下山。登りほどではないがやはり急傾斜なところがあつて、梯子やロープも張つてあるが、若いときに比べれば確実にバランスが悪くなつていて、こういうところも恰好良くなつてできない、やや不恰好な体勢で降りてゆく。

下山の途中で佐薙さんから紅葉した楓の葉について講習を受けたが、レベルが高すぎて頭にすんなりと入つてゆかない。博物学の世界はすごいと感嘆することしきり。

二時間足らずで元の登山口到着。既にマイクロバスも来ていて、幹事の手際の良い手配

に感謝である。

宿で身繕いをするとそれぞれに帰京、帰宅。佐薙、小野、本間、岡田、中村、宮武の諸先輩と私は会津若松駅近くの蕎麦屋で一杯、店のお姫さんに蕎麦をいろいろ訊きながら地酒を楽しませてもらって、山を終えた。

山登りそのものよりもその後の一杯がなかなか嬉しいひと時になつてきていた。

## キャンピングカー珍道中記

神野 隆(昭54年卒)

中学・高校時代の岳友M君から連絡あり、「中古のキャンピングカーを購入したので、試運転を兼ねて北海道・東北辺りに出掛けないか?」とのお誘いが、この夏突然舞い込んだ。

未踏の百名山も幾つか残す北海道は、私にとっては正に憧れの聖地! 迷うことなく快諾したものの、聞けばM君は数年前から肺気腫を患い本格的な登山は難しいとの由。それでは、まずは観光巡りを兼ねてのチンタラ道中にするかと、いささか針葉樹会報の内容に

はそぐわないが、以下、男二人の珍道中を記すことと致したい。

2016年7月19日（火）

舞鶴港から小樽

港へ 船中泊

夕刻M君が我が郷里和歌山市から自慢のキャンピングカーに2台のロードバイクを積み込んで颯爽と神戸の我が家に到着、早速私の私物を積み込み、小樽行きのフェリーが出港する舞鶴へと向かった。  
繁忙期で乗船は難しいのではと危惧したが、意外や新日本海フェリーの船中はガラガラの状態、近年は格安の航空便に乗客をごつそり奪われているそうで、8月の最盛期でも結構空席が目立つとのことであった。その為か船内ではビンゴ大会や女子大生のクラリネット演奏会、クイズラリーなど集客目的の無料のイベントが色々と開催されていた。

フェリー料金は4万6千円程度。

深夜の24時半に舞鶴を出港、20時間をかけて日本海を北上し、翌晩の20時半に小樽港に到着した。

7月20日（水） 小樽港到着 小樽港フェリー乗り場泊

20時半到着、そのままフェリー乗り場で車中泊。初めてのキャンピングカー泊であった

が港内のアナウンスがうるさく、なかなか寝付かれなかつた。

7月21日（木） 小樽市内観光後、余市へ 道の駅「余市」泊

市内外の格安駐車場を確保し、搭載して来たM君所有のロードバイクで早朝から市内観光に出掛けた。昔の自転車とは違いちょっと漕いだだけで簡単に40キロぐらいは出る。  
観光定番の小樽運河や堺町通りを見学、駅前の市場で海産物を購入、親戚筋へお中元代わりにと送付した。途中、M君がiPADを置き忘れるというアクシデントも発生したが、翌日、警察署に届けられ事無きを得た。

午後、隣町の余市へ移動、NHK連ドラ「マッサン」の舞台となつたニッカウヰスキーの余市蒸留所を見学した。隣接する道の駅を



小樽にて



余市の道の駅にて

7月22日（金） 積丹半島一周後、秩父別へ 道の駅「秩父別」泊

朝から同行のM君は夏風邪気味で体調不良、運転を替わり積丹半島を一周した。

1500ccのエンジンで2・5トンの荷重はさすがに辛く、一般道で40キロ、高速で80キロが精一杯。高速道路を使い札幌を通り過ぎ、留萌の南東の秩父別の道の駅でPキヤンとした。

7月23日（土）旭川の旭山動物園見学後、  
南富良野へ、金山湖キャンプ場泊

話題の旭山動物園を訪問、土曜日ということもあり駐車場も満杯に近い。その後、美瑛・

富良野方面へ南下、どこまでも続く麦畑やジヤガイモ畑に改めて北海道の広さを実感した。

南富良野の道の駅に泊まろうと思ったが、駅の屋台の女性二人組の助言により、近くの金山湖のキャンプ場を勧められる。湖の周りにきつちりと刈り込まれた芝生のフリーサイトが広大に拡がっており、キャンピングカー



金山湖（南富良野）のキャンプ場

の我々は隣接する駐車場で泊ることにしたが、何泊でもしたくなるような理想的なキャンプ場であった。

7月24日（日）帶広経由洞爺湖近辺へ道の駅「そうべつ情報館」泊

高倉健さん主演の映画「鉄道員（ぼっぽや）」のセットをJR幾寅駅で見学後、名物の豚丼を食べるべく、わざわざ帯広まで遠征する。その後、高速道路を使い、忙しく昭和新山のある有珠まで移動した。

7月25日（月）有珠山から函館市内へ函館健康センター駐車場泊

朝一番のロープウェイで有珠山へ登る。眼下の洞爺湖が美しい。下に降りて来ると、乗り場で、背の高い美貌の若い女子学生の集団に遭遇する。当方の直感通り、宝塚音楽学校の本科生の修学旅行の一団であった。背筋をピンと伸ばして颯爽と歩く姿は本当に美しく、巷で有名なAKBなど足元にも及ばない。午後、高速道路と一般道を乗り継ぎ、函館市内に到着する。

7月26日（火）函館市内観光後、津軽海峡フェリー乗り場へ 同所にてPキャン

前夜は市内の温泉ランドの駐車場にPキャン

ンしたが、早朝、五稜郭へ移動の際、ネズミをくわえたキタキツネに遭遇した。結構居るとは聞いてはいたが、こんな街中にも出没するとは本当に驚きだった。

小樽同様、五稜郭近辺の駐車場に車を停め、自転車で終日、市内観光に繰り出す。たった一週間の北海道滞在に未練は大いに残るもの、1日の乗鞍岳集合に間に合わせべく、タクシーフェリー乗り場に移動した。

7月27日（水）大間港上陸後零石へ道の駅「零石あねっこ」泊

対岸の下北半島大間まではフェリーでたつた3時間ながら、料金は2万円強と割高である。

下北半島は家屋もまばらでなんとなくうら悲しい。高速道路を使つたが移動距離も長く相当疲れた。キャンピングカーの旅は、やはり高速ではなく、地道をのんびりと走るに限ると改めて実感した。

7月28日（木）日本海沿いに南下、道の駅「象潟」泊

早朝から田沢湖のタツコ像、角館の武家屋敷を見学し、午後は秋田城址と秋田港のタワーを訪問した。この日の宿泊は、日本海に沈む夕陽の綺麗な象潟。芭蕉も愛でた九十九

島と夕陽を堪能したが、北海道と違い、夜は相当寝苦しい。車外に寝袋を持ち出し、蚊と奮闘しつつ夜を過ごした。

7月29日（金） 新潟県に突入、道の駅「関川」泊

早朝、鳥海山の麓にある獅子ヶ鼻湿原に立ち寄ったが、入り口の管理棟の責任者から「毎日、熊が出没している、この時刻に一人で行くのは危険！」と忠告され、直ちに引き返す。昨年は木の実も豊富で出産ラッシュ、日本全国で熊が出没している由。

7月30日（土） 長野県に突入、道の駅「千曲川」泊

7月31日（日） 平湯の森キャンプ場泊

小京都の小布施を訪ねた後、穂高町まで移動、昔から通っている駅前の一休庵で昼食後、M君の勧めで碌山美術館を訪問した。M君は中学校の元美術教諭であり、専門家の解説を受けながら時間を掛けて館内を見て廻る。午後、上高地線から安房トンネルを通り、平湯キャンプ場で山岳部同期の佐藤（周）と合流した。その夜は3人で豪華に焼肉パーティー、久々に美味しい肉と酒を堪能した。



乗鞍岳剣ヶ峰にて

8月1日（月） 乗鞍岳畠平「白雲荘」泊

M君が所属しているカヌークラブの面々とほおのき平で合流、専用バスで畠平まで上がる。我々3名が61歳で一番の若手であり、70歳以上の方も目白押しである。一日に高度差500m以上登らない、3時間以上行動しないを登山のモットーとしており、普通は日帰りコースである乗鞍岳周遊を2泊掛けるという、信じられないような山行計画である。

佐藤（周）と私は、時間の合間をみて魔王岳、大黒岳、富士見岳に宿のサンダルで登つてきた。

8月2日（火） 乗鞍岳「肩の小屋」泊

佐藤（周）は知床山行の準備のため、2泊で下山。私は数人を引率して最高峰の剣ヶ峰に登頂。

8月4日（木） 親不知を目指し白馬へ、黒菱平スキー場泊

北海道と違い本州は暑い！涼しさを求めて、八方尾根末端のスキー場に移動する。さすがに涼しく、久々に熟睡できた。

8月5日（金） スーパー林道経由山中温泉へ、道の駅「ゆけむり健康村」泊

8月6日（土） 北陸から敦賀経由京丹波へ、長女自宅泊

いよいよこの旅も終わりが近づいた。最後の夜は、数年前から田舎暮らしをしている長女夫婦の家にお世話になろうとM君と二人で勝手に決め、敦賀半島の原子力館を見学した後、BBQの食材を購入、京丹波の長女宅へとなだれ込んだ。その夜は近所の親しいご家族も呼びし、盛大な打ち上げ宴会と相成った。

8月3日（水） ほおのき平バスター・ミナル泊

カヌークラブの面々は帰郷、M君と二人居残る。

8月7日（日） 自宅到着  
正午過ぎに神戸の自宅に到着。20日間に及

ぶキャンピングカーの旅であった。

感じたことは色々あるが、一番思うことは前述した通り、キャンピングカーの旅は決して急がないことに尽きると思う。山登りとは正反対で、できれば明日の計画も決めないほうが楽しいのか、も知れない。出たとこ勝負、行き当たりバッタリ、計画しないことの楽しさを思う存分に満喫すること。次回の旅は、この精神ををモットーにチャレンジしてみたい。

## 南ア・荒川三山・赤石岳

佐藤 周一（昭54年卒）

【日 程】 2016年10月13～16日

【参加者】 神野隆・佐藤周一（ともに昭54年卒）

K女史（佐藤の登山ガイド受講生仲間）

### 【本計画の経緯】

2016年10月上旬（7日～9日）には、兵藤元史さん発案による甲斐駒・仙丈ヶ岳行の計画が立てられていたが、その実施の10日

ほど前に、佐藤（周）の登山ガイド講習仲間であるKさん（40歳・佐久市在住）から「南ア南部の百名山に登りたい」とのリクエストが寄せられた。神野と佐藤（周）にとつても、38年前の春山合宿中に起した悪沢岳滑落遭難事故の現場を再訪できる機会でもあり、甲斐駒・仙丈ヶ岳行から下山後は一旦、松本市内の兵藤先輩の実家に戻るも、中2日で再び南ア・荒川三山と赤石岳を目指す延長戦として位置づけた。

当初は静岡側から入山して、樅島を起点に千枚岳・荒川三山・赤石岳・樅島の周回ルートを想定していたが、稜線上の山小屋が10月初旬の三連休を最後に閉鎖されたために樅島までの東海フオレーストのバスが使えないのと、急遽、長野県側からの入山ルートである三伏峠から荒川三山経由で赤石岳を狙い、山中の避難小屋に3泊しながら長駆ピストンするというプランに変更した。

7時には三伏峠への取り付きに到着し、神野・K女史・佐藤のオーダーで登山開始。Kさんは40歳を迎えたスリムな女性で、見た目は若く独身かと思わせるが、なんと5年前に離婚して3人の娘を養育するシングルマザー。厳しい状況下ながら、永年の夢である登山ガイド志向が諦め切れず、大阪から昨年、山に囲まれた佐久市に移住し、アルバイトで生計を立てながら、トレーニング山行やガイド講習に参加するというタフガール。留守中の家事は、中1・小5・小3の3人姉妹が協働でこなしているとのことだが、これから娘たちの多感な時期を控え、教育費も掛かり始

幹線のトンネル工事現場に近いことから、鹿島建設などJV関係者の常宿となっていた。夕食時も、登山者は他に見当たらず、工事関係者の方が多かった。

【第1日目・10月13日（木）・晴れ】

前日のうちに、鳥倉林道の入口に近い小渋温泉・赤石荘に宿泊していた神野と佐藤は、朝食を握り飯弁当にしてもらい、払暁の5時過ぎに車で出発した。

赤石荘は大鹿村の外れに位置し、リニア新

めるのに…と他人」とながら心配してしまふ。

そんな身の上話をするうち、9時半には三伏峠に到着。大半の登山者はここから塩見岳を目指しており、赤石方面に踏み出すのは少數。稜線に出ると右側（西側）が崩壊によりガレた地形が続く。鳥帽子岳を過ぎ、前小河内岳に着くと漸く荒川三山が視野に入つてくる。小河内岳には丁度お昼に着き大休止。頂上直下の避難小屋を見に行くと、2階から入る冬季小屋はよく整備されて快適で、最終日にお世話になるのは悪くない。但しトイレが夏季期間中だけ使用可で、冬季は扉が打ちつけられて使用できなくなっているのは辛い。

小河内岳から急坂を下り樹林帯に入ると、北八ツや奥秩父を彷彿とさせる広くて気持ちの良い尾根を辿る。時々現れる草原は盛夏には高山植物の乱れ咲く花畠らしい。大日影山・板屋岳を過ぎ、樹林の間を下降していくと初日の宿泊地である高山裏避難小屋が見えてきた。

小屋には先客が2組いたが、いずれも室内の板敷きの上にテントを張つてゐる。厳冬期ならともかく、狭い板敷きをフルに使つても

精々10数人しか泊まれそうにない小屋なのに、半分以上のスペースを3人（1組は高齢カップル、もう1組は単独）で占有するのは如何なものかと感じ、神野がそれとなく注意すると、カップルの男性は「人が来たら片付ければ良いだろ」と開き直る。神野と佐藤が水汲みに行つてゐる間、Kさんが小屋の外で一服していたら、この男性が「後から来たくせに偉そうな物言いをしやがつて。あんな奴等は凍え死んだら良い」との声が聞こえたというから恐ろしい…。

5:20 赤石荘 → 6:00 鳥倉林道終点駐車場 → 7:00 登山口取り付き → 9:30 三伏峠 → 12:00 小河内岳 → 15:50 高山裏避難小屋（泊）

#### 【第2日目：10月14日（金）：晴れ】

今日と明日は、神野一人と佐藤十Kの2ペーティーに分かれる」とになる。理由は2年前に前立腺癌の手術を受けリハビリ中の神野には、荒川前岳の登りを越えて赤石岳まで行く負担が大きく、安全策として高山裏から悪沢岳までのピストンをして小屋に連泊し、3日目は昨日立ち寄った小河内岳避難小屋まで進み、そこで佐藤らの帰還を待ち受けるもの。

前岳と中岳のコルに荷を置いて、空身状態で悪沢まで往復する。途中の中岳避難小屋は小河内岳のそれと類似。悪沢岳とのコルに向



荒川三山

かつて下降していくと、38年前の遭難現場である急斜面が目の前に広がつて来る。

あの春合宿中、頭部と左足を骨折し瀕死の重傷を負った中西を収容するテントを立てた

コルは、こんなに狭かったのかと当時の感覺との相違に戸惑う。そして自衛隊のヘリはようこんな場所でホバリング出来たものだと感心する。コルから数十メートル上がつた地点に、滑落時に衝突したと思われる大岩がある。そこから上部100メートル近くにわたり白くザレた浅いレンゼ状の地形が見えるので、恐らくここを真っ直ぐに落ちたものと推測されるが確証はない。時間の経過と共に記憶が曖昧になつてしまつており、事故後の雪が消えた時期にでも速やかに現場検証に来ていれば・と悔やまれるが後悔先に立たず。

大聖寺平まではライチョウが遊ぶハイマツ帯をトラバースし、広い平から徐々に傾斜を強めていく。小赤石岳の肩に出る直前の急傾斜で道をロスト。丈の低いハイマツ帯を強引に直上する。30分ほど余計な汗をかいて稜線に出た。ここからは雄大な景観を左右に楽しみながらの稜線漫歩。風も穏やかながら、すでに4時を回つて日が傾き出しており励まし合いながら赤石山頂を目指す。

山頂に着いたのは5時少し前。11時間近くに及ぶハードな行程は夕日に照らされながらフィナーレを迎えた。寒さを感じるので早々に山頂での憩いを切り上げ、百メートルほど先の避難小屋へ。

急斜面上部の岩場を越えると緩斜面となり、しばらくで悪沢岳（荒川東岳）山頂に着く。遮るものない360度の眺望を楽しんだ後、往路を戻り、前岳コルにてパーティーを分ける。（以下は佐藤+K女史の縦走組の記録）

荒川小屋に向かつて始めは左下へのトラバース下降、やがてジクザグの急下降となり30分ほどで小屋に着く。丁度、小屋番の若い

男女二人が小屋閉めして下山するところだった。千枚小屋を経て下りる一人に労いの声をかけ、当方はテント場そばの水量豊かな水場でたっぷり補給し、本日最後の登りに挑む。

今夏の不順な天候のせいか、もしくは仕入れ量の見込み違いか、いずれにしろ想定外の「プレゼント」に欣喜雀躍。ワンカップを爛酒にして、おでんをつまみながら演歌をうなる…山頂小屋での豪華な晚餐となつた。

6:00	高山裏避難小屋	→	9:30	荒川前岳		
岳	→	11:00	悪沢岳	→	12:00	荒川前岳
岳	→	13:00	荒川小屋	→	16:45	赤石岳山頂避難小屋（泊）

### 【第3日目：10月15日（土）：晴れ】

放射冷却のためか冷え込んだ朝。早々に食事を済ませ、「」来光を拝んでから下山しようと身支度を整え山頂に立つも、余りの寒さにじつとしておれず、そのまま歩き出す。すると小赤石山頂付近で富士の中腹から太陽が顔を出した。角度から考えて、聖岳辺りなら「ダイヤモンド富士」が見えたかもしれない。

帰路は荷も気も軽くなつて快調に進み、荒川小屋から前岳への登りを終えてコルに着くと、今回の山行の核心部を終えられた安堵感

トボトルの飲料各種、缶ビール等のアルコール類、カップ麺やレトルト製品、おでんのパックまで箱単位で置いてある。

で満たされる。しかし、ここからの落差ある

大下降で膝がガタガタになり、高山裏避難小

屋に着いた時点では「ここから神野にサポートしてもらえば…」と感じる。気を取り直し、緩い樹林帯の登りを神野や私の各種「しきじり人生」を語りながら歩く。森林限界を抜けたところで本日最後の休憩。K女史からの貰いタバコが美味い。

小河内岳山頂に着くと、小屋からサンダルで來た神野とバツタリ出くわす。再会を喜び避難小屋に入ると、先客が二組（女性二人連れと単独男性）。女性組から具沢山シチューのお裾分けをいただき、縦走中の2日間の話をしながら最後の夜が更けていった。

5:30 赤石岳避難小屋 → 7:40 荒川小屋 → 9:40 荒川前岳 → 11:40 高山裏避難小屋 → 15:30 小河内岳 → 15:40 小河内岳避難小屋（泊）

#### 【第4日目：10月16日（日）：晴れ】

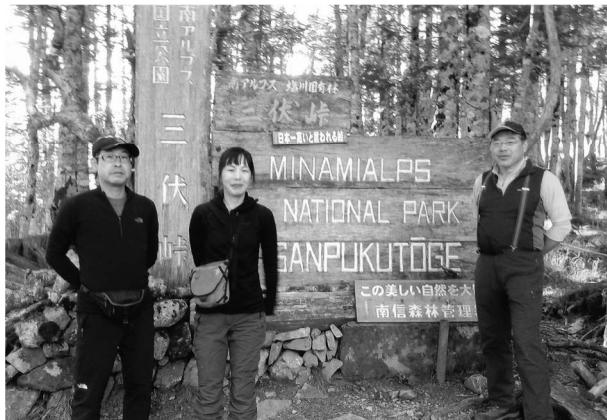
今朝も無風快晴だが、日が出る東方面の水平線は雲に覆われており、昨日のような綺麗なご来光は拝めなかつた。山頂周辺で写真を取り続いている先客たちを後にして下山開始。三伏峠は塩見岳から下りて来た登山者で

賑わっていた。

3日間の溜まつた疲れを膝や腰に感じながら下り、登山口に到着。折り畳み自転車が数台置いてあるのは、駐車場からの林道歩きを

嫌う人たちのモノか？

その林道をおしゃべりしながら歩いて車に着き、登山終了。K女史とはここで別れ、神野と佐藤は松川インター近くの温泉で汗を流して帰路についた。



三伏峠にて

#### 【最後に】

登山ガイド修業を始めた今年、各種講習会の合い間に各地の山へ出掛けたが、今夏までの不順な天候続きで「不完全燃焼」の日々が多かつた。その鬱憤を一気に解消するかのように恵まれて、懸案で念願の悪沢・赤石の山頂に立つことが出来た。20キロ近い荷を背負い、10時間超えの行動が出来るか、出発前は少々不安であったが、なんとか踏破出来たのは達成感があつた。出発前日、9月までに終えたガイド検定試験の合格通知が下宿先に届いていたこともあり、来年度から業務を始めることに名実共に自信を持つことが出来た有意義な山行であった。神野君、Kさん、ありがとうございました。

6:00 小河内岳避難小屋 → 8:30 三伏峠 → 10:00 登山口 → 10:40 林道終点駐車場（解散）

-----

## 2016年9月 キリマンジャロ紀行

岡田 健志（昭42年卒）

期間.. 2016年9月20日～30日

同行.. 佐藤久尚（S41年卒）、岡田健志（S42年卒）、中村雅明（S43年卒）

のカタール航空813便。3時間前からチエックインして貰えるというところなので、夕ご飯もそこに家を出る。

折から、台風16号が日本列島を直撃しており、この時刻には中心部は太平洋岸を北上している。東京では夜中の12時、ちょうど813便が離陸するころに雨風が最も強くなるとの予報である。

離陸の遅れが心配されたが、むしろ予定時刻より少し早めに無事離陸した。

9月21日（水） 晴れ

羽田（0:30 カタール航空813便）—

DOHA（5:45～8:35 カタール航空1355便）— キリマンジャロ国際空港（14:25～15:00）— ARUSHA（16:30）

い」という意味)なんて考えられない。

キリマンジャロ国際空港に着陸すると、乗客はタラップを使って地上に降り、そこから歩いて空港建物に入る。殆ど赤道直下にある空港は、アフリカの太陽に照らされて、眩しい。瞳孔を細めて空港建物に入ると、そこは薄暗く感じるほどで、入国審査の用紙に記入するために今度は瞳孔を目いっぱい広げなければならなかつた。

空港で、持参した米ドルをタンザニア・シリング（TNS）に交換する。レートは1\$=2020TNSだった。

キリマンジャロ登山に必要な諸事を世話する現地のツーリスト、BOBBY TOURS社が差し向けてくれた車に乗つて ARUSHAに向かう（15:00）

これからキリマンジャロ国際空港へ着陸態勢に入るという機内放送が流れた頃、機の右側に独立峰の山影が目に入った。山の名前を尋ねると、乗務員が「キリマンジャロだ」と言う。頂上の万年雪が見えないので「おかしいな」とは思ったが。（帰りの飛行機から、キリマンジャロは機の右側に見えたとのこと。反対側を見ていたわけだ）

頂上に雪の無いキリマンジャロ（「キリマ」（山を意味するスワヒリ語）、「ンジャロ」（山

2016年9月20日（火） 雨

今日のフライトは羽田発21日早朝（0:30）

途中の印象は、「やたら、平らで、ほこりっぽい土地だな」ということ。信号のない、幅ひろの道路を走ること1時間半、ARUSHAの中心に事務所を構える BOBBY 社に着き、ツアーデ金の残金を支払う。（16:30）夕方だつたせいもあるかもしけないが、極めてビジネスライクな対応をする経営者だった。

今夜の宿、HOTEL VENUS に投宿。夕食時刻まで少し間があつたので、ARUSHAの町を歩く。畠で採れた野菜を歩道に並べて販売し

ている無数の露店が、通りかかる人々に声をかけていた。その露店の背後にはトタン屋根

が形ばかりに張られ、その下でも無数の店が野菜や果物を販売している。生産者が直接販売しているようだつた。あまり売れているとは見えなかつたが…。



青空市場

アフリカでの最初の夜を迎えた。

\*以下、高度は「Trail Guide and Maps」によった。ただし、Gilman's Pointだけは現地の標識によつた。

めの策だ。  
ノルハは、MARANGU ROUTE の入り口で、入山申請して許可を受けたり、レンタル登山ギアを受け取つたり、ポーターへの荷物分けが行われる。我々もノルハで名前を登録し、出発の準備が整うのを待つた。

### 9月22日(木) 快晴

ホテル(8:55) — MOSHI(町の名前)のスープー(10:30～45) — MARANGU GATE(1860m 12:15～13:50) — KISAMBONI(昼食15:30～15:50) — MANDARA HUT(2170m 17:55)

ホテルのロビーでガイドのAGREY KIMAROと会つ。まじめそうな男だ。安心してガイドを任せられそう。40才で子供が5人もいるらしい。

BOBBY社の車がMARANGU GATE(1860m)まで送つてくれる。途中「2日分の飲

料水を準備すべし」といふ。MOSHIのスーパーに寄つて1・5L入りペットボトルを9本購入する。MARANGU GATEでわかつたことだが、キリマンジャロ国立公園内にはペットボトルの持ち込み禁止で、そのため、各自、飲料水は詰め替え用の水筒(レンタル料5\$)に詰め替えなければならない。公園内が放置ペットボトルで汚れる」とを防ぐた



公園の管理建物

今回、レンタル登山ギアとして、3人共通して3シーズン用のスリーピングバッグ(5\$／人・日)、岡田のみストック2本(20\$)とスリーピング・マット(30\$、これは使用する)となく、完全に無駄金だった)、佐藤・

初めての土地で、食堂ないしレストランを探すのも億劫なので、ホテルのレストランで夕食を摂る。

背の高いジャカランダの木に、薄紫色の花が一杯に咲いている、そんなARUSHAの町で

中村は詰め替え用の水筒（上記）をレンタルした。

荷物については、登山中使用しないものはHOTEL VENUSに保管してもいいことになった。登山中必要なものだけをサブザックに詰めて自分で背負い、あとは（約8kg位）はポーターに持つもらう。

こちらのポーターは、ネパールのように竹で編んだ大きな籠ではなく、縦長の円筒形の袋状の中に食材や我々の荷物を入れ、頭に乗せたり、背中の上部の首の付け根辺りに乗せて運ぶ。最終の宿泊地（小屋泊まりだが）のKIBO HUT（4713m）までは、高度の点はむかく、道そのものは、殆ど何の危険もない。

ポーターへの荷物分けに手間取ったのか、MARANGU GATE をスタートしたのは 13:50



トレッキングのスタート地点



インパチエンス

になった。

道は幅3mほどで、周囲は熱帯樹林。この日の天気のせいか、ジャングルの木陰のせいかアフリカのジリジリした陽ざしはなく、快適なトレッキングである。陽ざしが届かないので、日陰の花が目立つ。インパチエンスのピンクが可憐だ。日本の園芸種のインパチエンス（和名：アフリカホウゼンカ）の原種にあたるのだろう。

先導するサブガイドのJHONは目がとても良い。木をわたるサルを見つけると、「サルがいるぞ！」と教えてくれる。言われても、「どう、どう」と言う感じで、すぐには確認できないうが、そのうち木の枝が揺れているのでようやくあの辺にいるのだという目星がつき、サルが確認できる。

KISANBONI Lunch Spot で遅い昼食をとる。

ソロヒには、ハイ窓やトイレがあるが、男性が一人の場所を清掃している。「ゴミや食べ残しを動物に食い散らされないよう」、ということだったが、さすがに国立公園だけあるな、と感じた。

夕方、MANDARA HUT に到着。急勾配の三角屋根の棟が幾つも建っている。棟の両端が入り口になっていて、中央で2室に仕切られている。1室には入り口から見て両側に2ベッド、正面に2段ベッドがあり、4人の宿泊が可能である。つまり、1棟に8人まで宿泊できるようになっていて、これは、HOROMBO HUT でも同じだった。



MANDARA HUT

食前にキュウリのスープとポップコーンが出てるので、面白かった。が毎夕では飽きが来て、3日目からはストップしてもらつた。屋根には小さなソーラーパネルがついていて、各棟とも夜には電気が灯る。

食堂・トイレは別棟で夜なかに何度も小便に起きる」ことを余儀なくされる身には、辛かつた。

### 9月23日（金）快晴

MANDARA HUT (8:05) — MAUNDI CRATER 分岐 (8:25) — キリマンジャロ初お見面 (9:07) — 樹林限界 (9:45) — ハンチ (12:55～13:30) — HOROMBO HUT (33719 m 15:55)

この hut からも登山者が起きだしてきて、MANDARA HUT はにぎやかになる。今日の天気を保証するかのように、夜空の星の数はすごいかった。食堂棟で朝食を摂り、出発する。20分ほど熱帯樹林を歩くと MAUNDI CRATER への分岐に出る。帰りに寄る」ことにし、先へ進む。

MANDARA HUT を出発して1時間、昼なお暗い熱帯樹林は途絶え、樹木は低く疊となる頃、前方にキリマンジャロ Mt.MAWENZI



Mt.Kilimanjaro



熱帯樹林帯を出て

日本の山々のこと  
が、この上なく素晴らしいものとして思  
い出された。

ルートは広大なキリマンジャロの斜面を緩  
やかに登っていく。道路わきには、プロテイ  
アやエバーラスティングといった、白系の花  
が咲いている。赤系青系の花は数少ないのは  
季節のせいか？それとも地域のせいか？

行く先に高いアンテナが見えてきた。  
HOROMBO HUTだ。ここは、hut の数が非常  
に多い。ガイドに尋ねると、高度順化のため  
に連泊する人、最終キャンプのある KIBO  
HUT に登る人、キリマンジャロに登頂して  
HOROMBO HUT まで降りてくる人という3  
種の人（グループ）が集結するので、多数の  
hut が必要だという。すでに富士山頂上の高



プロティア



エバーラスティング

(4149m)  
が見えてきた。  
た。一足下り  
に砂ぼこりが  
舞い上がる、  
乾燥した地点  
から雪のある、

山頂を仰ぐとホツと  
する。一方、きれい  
な雪解け水の豊富な  
日本山々のこと  
が、この上なく素晴らしいものとして思  
い出された。

度に近く、われわれもここで高度順化のため連泊する。  
この日の夕方から朝夕にダイアモックス1錠(250mg)を服用する。

### ⑨月24日(土) 晴れのち曇り

HOROMBO HUT (9:00) — ZEBRA ROCKS  
(4200m 11:10~30) — HOROMBO  
HUT (13:15)

高度順化の日。今朝は、青空を背景に hut の屋根越しにキリマンジャロの頂上の雪が眩しい。



Mt.Kilimanjaro (HOROMBO HUT から)

高度順化といえば、ガイドは、"ボレボレ"と"水を飲め"をしきりに言う。彼らの経験から言うのだろうが、"ボレボレ"(ゆつくりゆつくり)は言わずもがな、モッケの幸いだが、水はそんなに沢山飲めるものではない。

高度順化のカリキュラムだが、富士山頂上と同じくらいの高度の HOROMBO HUT を出発し、ZEBRA ROCKS まで往復するというものの。ルームは Mt.MAWENZI の登山ルートを行く。4200m の高度には、低木のエリカが沢山生えており、といふにいは、ジャイアントロベリアやジャイアントセネシオが独特の姿をして生えている。土地は乾燥していて、植物の生存にとっては、厳しい環境に違ない。

ZEBRA ROCKS は、シマウマのようにタテに縞模様が入った大岩で、すぐそばまで近づ



ジャイアントロベリア

いたが、大変迫力のあるものだった。帰りは低い稜を乗越し、KIBO HUT からの道に入つて HOROMBO HUT に戻った。この道は、まるで砂漠の中の一本道で、乾燥しきつてほこりっぽいものだった。

2008年の中川隊の報告にもあつたが、キリマンジャロ登山中に高山病で亡くなる人もある。緊急を要する場合、この道を病院や救急車に備えてあるようなストレッチャーを使って HOROMBO HUT まで下へ、HOROMBO



ジャイアントセネシオ

HUTからは、救護車やヘリコプターで下界へおろすようになつてゐるらしい。救護に要する費用は、ヘリ代以外は入山時に支払う保険料でカバーすること。

ともあれ、この日は雲も低く、寒いくらいの一日だった。

夕食時には食欲もなく、出された食事も殆ど食べられなかつた。加えて下痢も始まり、この先が思いやられた。

9月25日(日) 快晴

HOROMBO HUT (7:40) — MAUA RIVER  
(3940m 8:45~55) — 南頂上周回路分岐 (9:23) — 最後の水飲み場 (10:10) — MAWENZI HUT 丸壁 (13:06) — KIBO HUT (4170m 14:30)

hut の二角屋根の向うに青空を背景にそびえるキリマンジャロ頂上の白い雪。」リ HOROMBO HUT からはまだまだ遠い。

今日のルートは砂漠の中の緩やかな登りの一本道。同じ日程で歩いているスペイン人や、イラン人のパーティーが追い抜いていく。彼らはとても元気で、食事時にも大きな声で喋り、食欲も羨ましくらい旺盛だ。彼の基礎体力の違いを目の当たりにしたと思った。



Mt.Kilimanjaro (HOROMBO HUT から)



(後日、三月会でこの話を出したら、年齢差の影響が大きいのではという意見が強かつた  
が)

キリマンジャロの頂上は雲がかかつたり現われたりであつたが、KIBO HUT の上、爆裂裂口のフチまでのルートははつきり確認でき、これが大変急に見えた。

現地で韓国人の男性とペアになつて登山中だつた日本女性が道端に座り込んでいた。今朝早くから頂上を目指したもののが高山病になり、これから下山するところだが疲労困憊の様子だつた。



## 傾斜のある砂漠道 (KIBO BUT)

きつた砂漠のような場所に何棟かの hut が建っていた。富士山頂上より 1000 m ほど高所に位置し、寒かった。

頂上に向けての真夜中の出発に備えて、夕食もそこそこに、シュラフに潜り込む。「仮眠したのが高山病の原因」という 2008 年中山川隊の経験を知つてはいたが、ここまで来た疲労とシュラフの中の心地よさに抗しきれずすぐに寝てしまった。

### 6月26日（月） 晴れ

KIBO HUT (25 日 22:55) — ハス・メイヤーズ・ケイブ (16 日 3:20~30) — Gilman's Point (16 日 8:20~8:40) — 砂走り終了地点 (UHURU PEAK がや行つた中村とサブガイドと合流 9:50~10:00) — KIBO HUT (11:20~13:06) — HOROMBO HUT (17:10)

#### （中村とサブガイドの行動）

ハス・メイヤーズ・ケイブ (3:30) — Gilman's Point (6:40~50) — UHURU PEAK (16 日 8:30~50) — Gilman's Point (9:30~40) — 砂走り終了地点 (9:50~10:00)

起きるやれり田が覚めたのは、22 時頃か？ トイレに起きるやうなまくグッスリと寝たよ

うだ。いよいよキリマンジヤロ登頂を目指しての一日が始まったのだ。

寒さ対策としては、下は綿入れのオーバーパー

ズボンを含めて 4 枚、上は着古したダウングヤケット含めて 4 枚、首には毛糸のネックウォーマー、毛糸の耳あてつき帽子、靴下は厚手のものを 1 枚、そして冬期用の手袋。

満点の星空のもと 22:55 に KIBO HUT を出発。出発は我々が一番早い。ヘッドライトの光だけではどこをどう歩いているかまったくわからない。ただ、先頭を歩くサブガイドの足元だけみつめて登る。「30 分歩いて休憩して」とピッチを指示する。呼吸が上手くできない、したがって苦しい。もう 30 分は歩いたか？ と時計ばかり見る。なんと歩きだしてまだ 10 分も経っていない。こんな調子で、悪戦苦闘してきたが、多分 5000 m を越えたあたりからだつたと思う。目が見えなくなつたのだ。正確に表現すると、視界が濃い霧におわれたようになり、サブガイドの足元が見えない。いやがサブガイドのスピードについていけず、間隔が開いてしまつたため足元が見えないとこもあるが、立ち止まつて待つてくれているその場所も見えないのだ。

6 時頃だろうか？ まわりが明るくなつて

きたが、目は相変わらず見えない。時計が見えないので、記録もできない。ルートは大きな岩も混じつた急登となり、「こんなルートを使つて下山できるのだろうか？」と思ひながらもガイドについてカタツムリの歩みを続けた。ガイドに向かつて「どいにいる？」と何度も尋ねながら。

悪戦苦闘すること 9 時間半、ようやくにして Gilman's Point まで登ることが出来た。大きな標識に「おめでとう」と書いてあつた。正面に雪の頂上が見える。カメラを出してシャンターを 2 度押すが、自分の目と同じで、2 枚ともピンボケになつてしまつた。

ガイドは我々 2 人に、「ウフル峰まで行くか？」とは言わなかつた。多分、彼としては視覚に支障をきたしている 2 人を無事に下山

登山路は、小石が敷き詰められたようなザラザラ道で、一步一歩確実に足を運ばないとずり落ちそうな感じがした。

ハンス・メイヤーズ・ケイブのあたりで、余力のある中村はサブガイドと 2 人でウフル峰まで行くべく先行した（実は、こういう事態になつたことは、この時は知らなかつた）。小生同様に、久さんも目が見えなくなつたが、「Gilman's Point まではなんとしてでも行くぞ」と執念を燃やしていた。

6 時頃だろうか？ まわりが明るくなつてきたが、目は相変わらず見えない。時計が見えないので、記録もできない。ルートは大きな岩も混じつた急登となり、「こんなルートを使つて下山できるのだろうか？」と思ひながらもガイドについてカタツムリの歩みを続けた。ガイドに向かつて「どいにいる？」と何度も尋ねながら。

悪戦苦闘すること 9 時間半、ようやくにして Gilman's Point まで登ることが出来た。大きな標識に「おめでとう」と書いてあつた。正面に雪の頂上が見える。カメラを出してシャンターを 2 度押すが、自分の目と同じで、2 枚ともピンボケになつてしまつた。

ガイドは我々 2 人に、「ウフル峰まで行くか？」とは言わなかつた。多分、彼としては視覚に支障をきたしている 2 人を無事に下山

また、下からブルーの上下を着た屈強な若者が上がってきて、私の両脇から腕をとり、下山介助してくれた。両脇をかかえられるので、彼らのスピードで下らせるを得なかつた。視覚は相変わらず不良だったので、

太陽は輝き、風もなく素晴らしい登山日和の下、岩混じりの道をゆっくりと下り始める。富士山の大沢のような砂利と砂の混じった下りになつたころ、ウフル峰まで登頂した中村とサブガイドが追いついてきた。ものすごいスピードだ。



Gilman's Point (5,685m) にて

本当に2人に頼り切りの下山となつた。KIBO HUT で着ていたものを脱ぎ、ポーターに預けるために荷造りをし、HOROMBO HUT 目指しての今日最後のアルバイトにとりかかる。視覚の不良はなかなか戻らなかつた。

HOROMBO HUT が近づいた頃、ガイドが「旦那の視覚不良が回復しなければ、明日は救護車を呼ばうか?」と聞いてきた。国立公園の救護車が HOROMBO HUT まで上がりつてくれるとのこと。私の歩みがそれほどよろよろしていたのか?

結局、明朝の目の状況をみて、それから SOS を発するかどうか決めようという結論になつた。ちなみに、コストは保険の範囲内での無料という感じだつた。

9月27日（火）快晴  
HOROMBO HUT (8:40) — MANDARA HUT (14:13～14:30) — 救護車に乗車 (15:25) — MARANGU GATE (15:40) — HOTEL VENUS (19:10)

下山の日。一昨日の朝と同様、快晴の空をバックにキリマンジャロが雪をいただいて聳えていた。  
ガイドやポーターにチップをわたす。チッ

プの額は下記。

全員にチップを渡したその時、サブガイドが音頭をとつて歌と踊りを披露してくれた。登頂おめでとうという気持ちの表現と、キリマンジャロ賛歌とでもいう内容か?彼らはとても陽気だ。

キリマンジャロをバックに全員で写真を撮つて、名残惜しいが下山開始する。救護車は MANDARA HUT まで来てくれるらしい。視覚は殆どもに戻つていた。



登頂祝いのダンス

ガイド	20\$/人・日	サブガイドにも同額
コック	10\$/人・日	1人
ポーター（兼ウェイター）	10\$/人・日	1人 朝夕に食事の世話をした
ポーター	8\$/人・日	5人



HOROMBO HUT にて

MARANGU GATE では下山届けを提出し、ガイドが翌日ホテルに届けてくれたが、登頂証明書を発行してもらつた。(私の分は当然のりんながら Gilman's Point までの証明書)

これから登る幾つものグループとすれ違ひながら、ホコリっぽい道を下る。Gilman's Point まで良くも行けたもんだ、そして高山病でフラフラになりながらも、良く戻つてこれたものだ、と感無量だつた。

街道沿いにはコーヒーやバナナのプランテーションが散在しているが、農業だけでは日本の半分近くの人口を養つしていくのは困難だろう。

公園内のロッジに宿泊するサファリもあるらしいが、我々のは「日帰りサファリ」。シマウマやヌーやインパラなどの草食動物が乾季のせいか枯れた草原に群れている。枯れた草は美味しいのだろうか? ライオンも木陰にデーレツと寝転んでいてピリツとしない。腹が減つたら狩りをするのだろうが…。

夕方、ガイドの AGREY が B B Q に案内してくれる。牛肉を焼いて塩をつけて食する。味は良いけれど硬くてなかなか呑み込めなかつた。

## 9月28日（水）快晴

HOTEL VENUS (8:40) — TARANGIRE NATIONAL PARK (11:20～16:00) — HOTEL VENUS (18:35)

今日も朝方は雨だつたのしい。ホテルの窓から見える道路が濡れていね。

TARANGIRE NATIONAL PARK のサファリに行く。途中街道沿いにある大きな土産屋へ立ち寄つた。木彫りのマサイ族の人物や動物、キリマンジャロ・コーヒーなどが売られている。

街道沿いにはコーヒーやバナナのプランテーションが散在しているが、農業だけでは日本の半分近くの人口を養つしていくのは困難だろう。

今回も航空券の手配、ツアーカンパニーの佐藤(久)さんのお世話になつた。本当に有難うございました。



## 9月29日（木）晴れ

夕方のフライトまで時間があるので、AGREY が ARUSHA の町を案内してくれる。博物館や本屋を案内してくれた。ジャカランドの花が真っ盛りだつた。

バスターミナルにも連れて行ってくれたが、各方面に行くマイクロバスと乗客が満ち溢れおり、これぞカオスという印象。AGREY は「持物に気をつけるように」と注意してくれたが、何事も起きなかつた。

この日はキリマンジャロ国際空港発のカタール航空で、往路と同じドーハ経由で羽田に帰着した。

私自身、アフリカ大陸は初めてだつたが、接した人々の陽気さや土地の広さが印象に残つた。

## キリマンジャロ最高峰

### ウフル・ピーク登頂

中村 雅明（昭43年卒）

2016年9月26日（月） 晴

#### 1. ギルマンズ・ポイントまで

26日キボ・ハットを23時10分前に出発し、30分歩き5分休憩。ベースでヘッドランプの明かりを頼りに先行者の足並みに合わせて黙々と登りました。サブガイドのJHON、岡田、佐藤、中村、メインガイドのAGREYの順です。

ハンス・マイヤーズ・ケイブ（5150m、ギルマンズ・ポイントまでの間点）を過ぎて少し傾斜の緩くなつた地点で、佐藤さん、岡田さんに高山病と思われる下痢、視覚障害（視野が狭くなりしかもすむ）が出て前進ストップしました（3:20）。そこで佐藤さんの指示でサブガイドと中村が先行することになりました。それまでの登りで私もかなりへばっていましたので「これは困った。一緒に休みたい」と思いましたが、行けるところまで頑張るしかないと観念し歩き始めました（3:30）。それからが大変。それまでより早いペースのサブガイドに必死について行きますが、息がはずみ5分歩くと立ち止まつて呼吸を整えます。6時頃に東の空が白んできました。6:15マウンテンジ峰の左手から日の出。サブガイドが写真を撮つてくれました。ギルマンズ・ポイントの近くになると傾斜がきつくなり岩場まりの登りでさらに苦しくなりました。立ち止まる間隔が短くなり、サブガイドが辛抱強く待つてくれました。息も絶え絶えで6:40噴火口縁のギルマンズ・ポイント（5685m）に到着。小屋から7時間40分。8年前の蛭川さん達より40分多くかかりました。何はともあれここまで登れば登頂が認定されるのでホッとしました。

サブガイドにギルマンズ・ポイントの看板の前で写真を撮つてもらつた後、ウフル・ピーグ、直径2.4kmの火口（富士山の火口面積の約16倍）、その先の北氷河の写真を撮りました。初めて目にする「キリマンジャロの雪」に感激です。写真を撮り終わつてもまだ息をはずせていると、サブガイドのGOがかかりました。8年前の針葉樹会パーティーはガイドの指示で前進断念。ここが最高到達点となつたので、内心ここでSTOPではと甘い期待をしていましたが前進を余儀なくされま

した。

#### 2. ウフル・ピークまで

幸い、風もなく陽が高くなつて気温が上昇し始めたので暖かくなりました。ギルマンズ・ポイントからウフル・ピークの中間点であるステラ・ポイントまで岩峰を回り込む巻き道がありました。サブガイドは無情にも岩峰稜線沿いの登り道を進みました。「なぜ苦しい方を登るの」とサブガイドを恨みました。が、登り切つた所でサブガイドが下を差して「マチャメ・ルートのテント場」と言つたので、この為だったのかと納得しました。テントが数張見えました。バラフ・キヤンブでしよう。ステラ・ポイント（5756m）には、ウフル・ピークから戻つてきたと思われるグループが休んでいました。その先で腰を下ろして休憩。そこからは南氷河が良く見えました。お湯を飲み、チョコレートを食べて一息付きました。

ここからウフル・ピークまでは緩やかな登りですが、これまでの長時間の登りで疲れた身にはつらい登りでした。でも苦しいながらも左手にずっと見える南氷河の氷壁に目を奪われます。何度も立ち止まり息を整える繰り返しは今までの登山の中で一番の苦しさでした。頭痛、吐き気、眠気などの高山病の症状



ウフル・ピーク

ができました。頂上の看板を背にした写真、テープル氷河を背にした写真をサブガイドが沢山撮ってくれました。帰国してから見るとニコニコ笑っている写真が多いので人生最高地点到達が嬉しかったのでしょう。サブガイドの写真、2人の写真も撮いで8:50下山開始。

下りでは時折足を止めて、火口内部、ギルマンズ・ポイント、南氷河を撮りました。と言ふとのんびり下った様ですが、下りとは言え息がはずみました。20分の頂上の休憩ではとても足の疲れは回復しませんでした。若干の登りでも苦しくなり、都度立ち止まりました。ギルマンズ・ポンントに戻ったのが9:30、頂上から40分。小憩し一息つきました。

そこからはサブガイドがサブザックを背負ってくれたので助かりました。こんな急なところを登つたのかと驚く岩混じりの急なザラザラした道なので慎重に下りました。傾斜が緩くなると富士山の須走りに似た砂走りをサブガイドがすごいスピードで下り始めました。私も必死について走り下りますが、疲れている足では辛くてしゃがみ込みたくなりました。途中一回腰を下ろして休憩した後の下りで一気に高度を下げ、10時少し前に佐藤さん達3人に追いつきました。メインガイドの方が先です。

幸い頂上には誰もいません。微風快晴で心地良い頂上です。反対側から単独行の外人が登つて来ました。サブガイドが「Climbing?」と声を掛けたので「Western Breach Route」から登つて来たのだじょ。何故か頂上に立ち寄らなかつたので、写真をゆつくり撮ること

### 3. 下山

下りでは時折足を止めて、火口内部、ギル

マンズ・ポイント、南氷河を撮りました。と言ふとのんびり下った様ですが、下りとは言え息がはずみました。20分の頂上の休憩ではとても足の疲れは回復しませんでした。若干の登りでも苦しくなり、都度立ち止まりました。ギルマンズ・ポンントに戻ったのが9:30、頂上から40分。小憩し一息つきました。

そこからはサブガイドがサブザックを背負ってくれたので助かりました。こんな急なところを登つたのかと驚く岩混じりの急なザラザラした道なので慎重に下りました。傾斜が緩くなると富士山の須走りに似た砂走りをサブガイドがすごいスピードで下り始めました。私も必死について走り下りますが、疲れている足では辛くてしゃがみ込みたくなりました。途中一回腰を下ろして休憩した後の下りで一気に高度を下げ、10時少し前に佐藤さん達3人に追いつきました。メインガイドの

AGREY が「congratulation!」と言つて握手してくれました。佐藤さんかの「随分早かったね」と言われました。佐藤さん、岡田さんもギルマンズ・ポイントまで登つたと聞き、安堵しました。

キボ・ハツトに戻つたのが11:30。最後は敗残兵みたいにへトへトになつた3人でした。出発してから12時間30分の行動。平均年齢73歳の3人にとっては過酷でした。

さらにつらかったのは1時間半休憩した後、ホロンボ・ハツトまで4時間下つたことです。疲れが胃に出て胃もたれする胃をさすりながら、時折岩に腰かけて休み休み下りました。ホロンボ・ハツトに17:15着。この日の通算行動時間は18時間15分。今までの最長行動時間です。その晩は私一人、一切食べられず寝込みました。それから帰国した翌日まで胃の不調が続きました。10月2日によくやく胃の不調が治り、通常に食べられる様になりました。普段の生活に戻りました。

### 4. 付記

1) ヘミングウェイの小説「キリマンジャロの雪」で有名な頂上部の氷河は今から100年前には山頂の全てを覆っていたそうです。1970年代に比べて現在の氷河分布は半減して、20年後には消滅してしまう、と言われ

ています。今回見た氷河が消えゆく運命にありますと帰国後に知りました。山行前に知つていたらもつと感慨深く眺めたことでしょう。

2) 帰国後まで続いた胃の不調をもたらした激しい疲労は、5000m以上の高度のしかも1000m以上の高度差の登りで息が切れ、ウフル・ピークからのかなりのハイスピードの下りが72歳にとつては体力の限界を超えたことによるものでした。

しかし、帰国後に反省したのは行く前のトレーニング不足です。8月5日に南アから帰った後に山に行かず、また毎朝続けていた朝の散歩+ラジオ体操をサボッてしまつてキリマンジャロに向かつたのです。年齢を考えると8年前の針葉樹会パーティーに比べて甘い姿勢でした。

3) ウフル・ピーク登頂は2016年4月卒業された高橋直道さん、安藤桂吾さんが大学在学中の2015年2月に成功されていました。ルートは我々が採ったマラングルートでなく、全てテント泊のマチャメ・ルートです。登頂日は防寒装備が不十分で、低体温症で意識が朦朧とする中での厳しい登頂でした（橋山岳会HP『山行報告』—『海外山行報告』—『キリマンジャロ山行記録』参照）。マチャメ・ルートは自然を堪能するテント泊、絶景の連続と言つても良いほど素晴らしい景色が

続ぐルートですから学生向きです。就職も決まった大学4年の秋に山岳部の活動の総決算として行くことを薦めます。なお、マチャメ・ルートはバラフ・キャンプでムウェカ・ルートに合流し、そこからステラ・ポイント経由でウフル・ピークを目指します。前述のガイドの「マチャメ・ルートのテント場」は「ムウェカ・ルートのテント場」が正確な表現です。

4) 幸い高山病の症状は出ませんでした。その対策としてダイアモックスを入山2日目（マラング・ハット）から朝夕半錠（125mg）服用しました。これが効いたのか不明です。ネパールのトレッキングでカラ・パタール（545m）、ゴーキョ・ピーク（5360m）登頂、トロン・パス（5416m）越えで何とも無かつたので高山病になりにくい体质のようです。

登頂前、キボ・ハットでは22時までの4時間位、3人とも仮眠しました。眠らない方が良いというアドバイスがありましたが、疲れによる眠気が勝ちました。

良かつたのは、普段足が攣つてから治療薬として飲んでいた「芍薬甘草湯」を登頂前に予防薬として飲んでおいたことです。これを飲んでいなかつたら、おそらく途中で足が攣りウフル・ピークに到達できなかつたでしょう。

## キリマンジャロ紀行付記 ダイアモックスと高山病について

佐藤 久尚（昭41年卒）

今回、岡田、佐藤に5000mメートルを超えた辺りで視力障害—かすみ目—の症状が出た。具体的には、あたかも濃い霧の中にいるようで、周りの景色がぼんやりとしか見えない。それと同時に目の焦点が定まらず近くのもの、例えばデジタル時計の文字が読めないという症状である。そしてこの症状は、ホロンボハット（3720m）まで下つて一晩寝た翌日には約8割方回復したが、完全に回復するのには、さらに1日程度の時間がかかりました。

いろいろな登攀記などで、高所では視力障害を起すという記録を読んだことがあるので、最初は単純にこれは高度の影響だとばかり思っていた。しかし下山後症状が出なかつた中村氏がダイアモックスを岡田、佐藤の半分の量しか飲まなかつたということを知るに及んで、これは高度の影響だけではない、ダ

イアモツクスの影響もあるのではないか、と思うようになった。岡田、佐藤の二人は、登頂の二日前から朝晩2回ダイアモツクスを1錠(250mg)飲んだのに対して、中村は半錠(125mg)しか飲まなかつたからである。そして帰国後、確認のためインターネットでダイアモツクスについていろいろ調べてみると、次のことが分かつた。

ダイアモツクスは眼圧を下げる効果があるので、緑内障の治療薬として使われる。

副作用として、「手指のチリチリ感」などのほかに「目のかすみ」の症状が出ることがある。

1回に飲む量は、体重により異なる。体格の良い外国人は1錠(250mg)だが、日本人は半錠(125mg)が適量。これを見て確信が深まつた。岡田、佐藤は明らかにダイアモツクスの飲み過ぎであつた。高度が上がり気圧が下がると眼圧が下がるのが普通であるが、岡田、佐藤はダイアモツクスを適量以上に飲んだ。そのため眼圧が下がっているところに、気圧の低下によりさらに眼圧が下がつたものと考えられる。これまで5,000mを越える高度は数回経験しているが、一度も「目のかすみ」を経験したことはない。またダイアモツクスを本格的に飲んだのは今回が初めてであつた。従つて、今

回、「目のかすみ」症状が出たといふことは、ダイアモツクスの過剰摂取と高度のダブルの影響と考えるのが合理的であろう。素人考えかもしれないがそう信じている。

## キリマンジャロ登山の会計報告

岡田 健志 (昭42年卒)

今回の山行に費消した経費は下表のとおりです。一人当たりの経費は約335,000円でした。

2016年9月 キリマンジャロ行 会計報告 (3人分)

	3名	合計	円換算
航空券 (往復)	433,905	円	433,095
航空券税およびサービス料	25,920	円	25,920
ツアーデ金	3,600	\$	370,800
レンタル料 (sleeping bag) 5\$/日・人	90	\$	9,270
ホテル代 (3泊)	270	\$	27,810
空港送迎	100	\$	10,300
SAFARI 代金	405	\$	41,715
ツアーデ金前払い振込手数料	6,500	円	6,500
航空券、ツアーデ金、SAFARI 代金 合計	4,465	\$	925,410
465,515	円		
ガイドチップ (2名分) @20\$*6日*2名	240	\$	24,720
ボーター・チップ (5名分) @8\$*6日*5名	240	\$	24,720
ボーター兼ウェイターチップ (1名分) @10\$	60	\$	6,180
コックチップ (1名分) @10\$	60	\$	6,180
(ガイド・ボーターへのチップ小計)	600		61,800
SAFARI ドライバーチップ	20	\$	2,060
夕食、お土産等 (詳細下記)	308,000	TNS	15,705
			1,004,975
一人当たり平均			334,992
交換レート 1\$=2,020TNS=103円	TNS	はタンザニアシリング	

	タンザニア通貨	同左円換算
9/21 (夕食)	43,000	TNS 2,193
夕食	2,000	TNS 102
夕食チップ	3,500	TNS 178
ビール	2,500	TNS 127
ミネラルウォーター	3,000	TNS 153
ホテルボーター (チップ)		
9/22 ミネラルウォーター	9,000	TNS 459
9/27 ホテルボーター	4,000	TNS 204
夕食	60,000	TNS 3,059
9/28 夕食 (BBQ)	27,000	TNS 1,377
9/29 空港までのドライバーチップ	20,000	TNS 1,020
ダラダラ (安価なタクシー)	2,000	TNS 102
Museum	31,500	TNS 1,606
喫茶	***	TNS
コーヒー (余剰 TNS でお土産)	50,000	TNS 2,550
Mr.Agrey へ謝礼	50,500	TNS 2,575

なお、今回ネットで、ダイアモツクスについていろいろ調べてみたが、「何故高山病の予防に効くのか」「本当に効くのか」良く分からなかつた。このことも併せて記しておきたい。

懇親山行  
畦ヶ丸

佐藤 久尚（昭41年卒）

「ナンチク（高崎治郎、昭31年卒）さんを偲ぶ会」が中川温泉で開かれるのを機に、西丹沢での懇親山行を企画した。対象の山は、畦ヶ丸（1292・6m）。都心からのアプローチが容易で、季節も紅葉が楽しめるベストシーズンなので多数の参加者が期待できると思つて、広く針葉樹会員並びに学生部員に参加を呼び掛けた。が、結果は前日の「ナンチクさんを偲ぶ会」に参加した者のうちから9人が参加しただけであつた。

（参加者）

佐薙恭（昭31）、仲田修（昭36）、竹中彰（昭39）、本間浩（昭40）、池知昭洋（昭41）  
佐藤久尚（昭41）、岡田健志（昭42）、中村雅明（昭43）、宮武幸久（昭45）

2016年11月9日 晴れ

中川温泉入口8時13分発のバスで、大滝橋まで行き歩き出す（8:25）。道は大滝沢に沿つ



た歩き易い道で、東海自然歩道という」ともあつて標識も良く整備されている。  
しばらくは沢に沿つた緩い登りが続き、一軒家避難小屋を過ぎたところから尾根に取り付く少し急な登りとなる。

それを登り切り、畦ヶ丸から屏風岩山に続く尾根の上に出たところが大滝峠上という所。そこには紅葉に染まつた西丹沢の山並みと、5合目位まで雪をかぶった白銀に輝く富士山の眺めが待つていた。さらに所々大きな



段差のある尾根道を登ると畦ヶ丸避難小屋に着いた（12:55）。そこから頂上までは約5分程度であるが、そこには木製の大きなベンチもあり休むには絶好の場所なのでランチ休憩とする。

ランチ後、菰釣山経由山中湖の平野まで行くという中村（雅）氏と別れて、8人は頂上に向かう。5分で頂上に着いたが、畦ヶ丸の頂上は樹木に囲まれた何の変哲も無い頂上なので、休むことなく通り過ぎ、西沢を目指し



一軒家避難小屋にて

新松田駅にて駅前の居酒屋で打ち上げ。メンバーに4月の懇親山行（大山）の打ち上げ時に、伊勢原の居酒屋で場外波乱劇を演じた面々がそろっていたため、その時の話で大いに盛り上がった。ただ今回は、酒宴も大団円で終わって、皆いい気分で家路についた。

河口湖まで歩きました。

今回の畦ヶ丸は2009年3月に「三四郎会」の前哨戦（西丹沢山行）で竹中さんと一緒に登りました。その報告の最後に「紅葉の季節に、白石峠—畦ヶ丸—菰釣山—高指山—山中湖のコースを歩きたい」と書きました。佐藤さんからご案内いただいた畦ヶ丸までコースがその時のコースであつたので、畦ヶ丸で皆さんと別れ、その日は甲相国境尾根を菰釣避難小屋まで縦走しそこに泊まり、翌日菰釣山—石程土山—高指山まで縦走し、山中湖の平野に下山する別行動をお伺いしました。その別行動が了解され、直前の天気予報で好天が見込めたので延長線を実施することにしました。

2015年から体力が残っている内に登り残した山を縦走でトレースする志向が強くなりました。懇親山行でも延長戦を考えます。

2015年9月の「妙高山」では妙高山を下った長助池分岐で皆と別れ高谷池ヒュッテに泊まり、翌日、火打山—焼山—富士見峠でテント泊、翌々日雨飾山まで縦走する計画を力大統領選勝利を知る。

新松田駅にて駅前の居酒屋で打ち上げ。メンバーに4月の懇親山行（大山）の打ち上げ時に、伊勢原の居酒屋で場外波乱劇を演じた面々がそろっていたため、その時の話で大いに盛り上がった。ただ今回は、酒宴も大団円で終わって、皆いい気分で家路についた。

河口湖まで歩きました。

今回の畦ヶ丸は2009年3月に「三四郎会」の前哨戦（西丹沢山行）で竹中さんと一緒に登りました。その報告の最後に「紅葉の季節に、白石峠—畦ヶ丸—菰釣山—高指山—山中湖のコースを歩きたい」と書きました。佐藤さんからご案内いただいた畦ヶ丸までコースがその時のコースであつたので、畦ヶ丸で皆さんと別れ、その日は甲相国境尾根を菰釣避難小屋まで縦走しそこに泊まり、翌日菰釣山—石程土山—高指山まで縦走し、山中湖の平野に下山する別行動をお伺いしました。その別行動が了解され、直前の天気予報で好天が見込めたので延長線を実施することにしました。

立てました。ところが山行前の天気予報が悪天だったので取り止めました。

2015年12月の「本社ヶ丸・清八山」では、清八山で皆と別れ、三ツ峠山まで縦走して三ツ峠山荘に泊まり、翌日府戸尾根を下り河口湖まで歩きました。

## 懇親山行延長山行

（畦ヶ丸—菰釣山—高指山—平野）

中村 雅明（昭43年卒）

期 間 … 2016年11月9～10日

参 加 者 … 中村雅明（単独）

### ●はじめに

2015年から体力が残っている内に登り残した山を縦走でトレースする志向が強くなりました。懇親山行でも延長戦を考えます。

2015年9月の「妙高山」では妙高山を下った長助池分岐で皆と別れ高谷池ヒュッテに泊まり、翌日、火打山—焼山—富士見峠でテント泊、翌々日雨飾山まで縦走する計画を力大統領選勝利を知る。

菰釣避難小屋は2006年12月に建て替えられた立派な小屋ですが、水場が近くに無く、小屋下のブナ沢乗越からブナ沢まで下りなければなりません。そこで水2リットルを持参、食料・寝具・コツヘル・ガスバーナー

も背負うので 60° のザックで畦ヶ丸に登りました。ザブザツクの皆さんに遅れないか心配でしたが同じペースで歩けました。

#### 〈行程・タイム〉

- 11月9日 畦ヶ丸 (12:55) — モロクボ沢ノ頭 (13:16～32) — 大界木山 (14:06～16) — 城ヶ尾峠 ((4:36～40) — 中ノ丸 (15:18～36) — 茵釣避難小屋 (16:00)
- 11月10日 茵釣避難小屋 (6:20) — 茵釣山 (6:40～45) — ブナノ丸 (7:01) — 油沢ノ頭 (7:20～27) — 3P<sup>3</sup>高指山 (9:35～45) — 平野バス停 (10:20～40) = (バス) = 富士山駅 (11:22)

#### ● 11月9日 (水) 晴れ 後曇り

12:55 皆もんと別れてモロクボ沢ノ頭に向かって下りました。出発が予定より 30 分遅れての出発なので少し早足です。20 分でモロクボ沢ノ頭に着きました。ここから甲相国境尾根を歩きます。甲相国境尾根は大室山以西、三国山までの山梨県(甲斐国)と神奈川県(相模国)の県境に延びる延長約 20 km の尾根です。大室山周辺を除けば全体的に高低差が少ない尾根で、標高は 1100 m ～ 1300 m 程度です。



茵釣避難小屋

ます。その為、道標、ベンチが良く整備されています。また、急な登り下り道には丸木階段とプラ土嚢が設置され安全歩行が出来ます。大界木山、城ヶ尾山、中ノ丸、ブナ沢ノ頭と小ピークが連なる尾根道は樹林の中、晚秋で木々の葉が落ちているので木の間越しに山が望め、慰められ登りも苦になりません。誰にも会わずに、静かな山の良さを味わいました。快調に歩いて 16:00、5P<sup>3</sup>時間で茵釣避難小屋に着きました。出発が遅れましたが予定した時刻に着いてホッとしました。

#### ● 11月10日 (木) 曇り

今日の行程は短いので 5:10 起床。モチ入り煮込みうどんの朝食を済ませ 6:20 小屋発。天気は曇り、雨の心配は無さそうです。1p<sup>3</sup>で 6:40 茵釣山頂 (1379 m) 着。畦ヶ丸 (1296.2 m) より高いです。樹林道を抜けた頂上は、かつてはブナがうつそうと茂っていましたが今は明るく開けています。南西には山中湖越しに富士山、北西には御正体山が望める絶好な展望台です。

富士山は 5 合目から上は雪、手前に紅葉の甲相国境尾根のコントラストが見事です。曇り空が青空であつたら最高でした。15 分の小憩後、かなり下りほぼ同じ高さまで登つてブナノ丸 (1340 m)。ここから尾根は高指山まで南西にほぼ真っ直ぐ伸びています。正面また稜線部は東京都の高尾山から大阪府の箕面山を結ぶ東海自然歩道の一部になつてい

小屋はまだ新しく綺麗で快適でした。大きな木のテーブルで夕食の準備。例によつてお湯を注げば出来上がるフリーズドライの五目ごはん、にゅうめん、ミートボールで 5 時前には夕食を終え、あとは寝るだけです。暗くなつても誰も到着しません。晚秋なので夜の寒さが心配でした。3 シーズン用寝袋なので、シュラフカバー 2 枚、上下のダウンウェアーも着込んで寝たので寒さを感じないで眠ることが出来ました。

に富士山、右手に御正体山を眺め、時折現れる心を洗われる鮮やかな紅葉を愛でながら気持ち良く歩きました。

油沢ノ頭、樅ノ木沢の頭、西沢ノ頭と小ピークを次々に越えて 8:20 石保土山（1,293・7 m）着。その先の大棚ノ頭で山伏峠への道を右手に見て直進。高指山までの道は落ち葉敷きつめた明るい樹林道で気持ち良く歩きました。

高指山手前の富士岬平は富士山の絶景ポイントでした。ススキの原越し、眼下に大きく広がる山中湖からすつきりせり上がる富士山に見とれました。さるに 15 分進んで 9:35 高指山（1,174・1 m）着。まだ早いせいか誰もいません。結局、昨日の畦ヶ丸からずつと誰にも会いませんでした。ここも富士岬平と同様な富士山の絶景ポイント。中腹から頂上まで一面カヤトの草原名所です。カヤト越しに富士山の写真を沢山撮りました。また、富士山の右側に山中湖を巡る大平山・平尾山・石割山の山稜を望みます。この山稜は 2013 年 10 月に藤原朋信さん（昭 44）、峯弘卓さん（平 26）と「中村学校開校記念」山行で歩きました。甲相国境尾根はさらに切通峠・鉄砲木ノ頭・三国峠・三国山に続きます。東海自然歩道は高指山から平野に下ります。そのコースで平野に下りました。カヤトの斜面

を下り別荘地に出ると後は車道を歩き 10:20 平野バス停に着き山行を終えました。

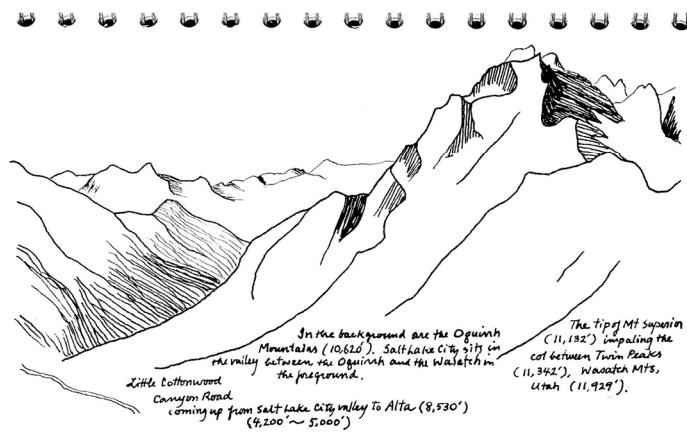
今回は、甲相国境尾根をモロクボ沢ノ頭から平野まで歩きましたが、次回は北上して白石峠へ加入道山・大室山まで歩き道志側に下山したいと思います。また、三輪神社から御正体山に登り山伏峠・大棚山ノ頭のコースも歩いてみたいと思います。

## 「ハヤだ！」

加地 幸雄（昭 33 年卒）

1970～72 年カナダの東部で教壇に立っていましたが、カナダ政府から三年目の就職許可延長を拒まれ、米国で教職を捲いていた時、候補校の一つにユタ大がありました。ユタは名ばかりで、地図帖を開いて位置を確かめなければならぬ始末。しかし、就職の現地面接に来てみると、良い山が立ち並んでいるではありませんか。

ウオサッチという連山で、塩湖城（Salt Lake City）のすぐ東側を南北に走っています。3



『Wasatch 連山』 加地 幸雄（昭 33 年卒）描画  
右のピークが Mt.Superior(3,652m)その後ろに重なるように Twin Peaks(3,721m)、遠くの連山は Oquirrh Mountains

日本では、学生時代、家から登山口まで少なくとも数時間。たとえば、世田谷の家を夜の九時か十時頃発ち、新宿から夜行列車、翌朝白銀に輝く後立山を見て勇み立ち、でした

## 学生の活動

が、当地では、この素描の中の谷底の車道にある幾多の登山口は、家（標高1389米）から僅か四五分です。

当時ミネソタ州で教鞭を執つておられた石君が一度おいでになり、「丁度上高地に住んでいるみたい」と言つておられました。（針葉樹会報復刊第40、41号 1974年）

それ以来既に半世紀に近く、ウォサッチの山行日数も千日をはるかに超え、当地の山の翁になりました。

この素描には入つていませんが、レイモンドという3100米の好山があります。その山に、針葉樹会員では、瀬田さん、塩川君と市川君と別々の機会に同行させていただきました。

本格的冬山登山などしなくなりましたが、レイモンドならまだ登れます。今年も山行日数60日をもくろんでいます。在米の方々、または訪米の機会がある方、お立ち寄りください。大歓迎でお供します。私のメールアドレスは y.kachi@utah.edu です。

今年の一橋祭では「輪投げ」を出店した。当初は昨年と同じくイカ焼きを出店する予定だった。しかし、食品を扱えなくなつたため、「輪投げ」に変更になった。食品以外での出店は初めてであったが、小さい子供を中心に予想以上に賑わった。後輩たちは場を盛り上げ、

### 2016年 月見の宴報告

上 茂衡（4年、部長）

#### 参加者

OB7名（敬称略） 中村雅明（昭43）、宮武幸久（昭45）、前神直樹（昭51）、松田重明（昭53）、佐藤周一（昭54）、高橋直道（平28）、太田貴之（平28）

学生20名 5年（1人）西山祥紀（経）  
4年（3人）辰川貴大（法）、上茂衡（法）、  
大谷彩子（商）

3年（5人）大矢和樹（法）、内海拓人（法）、  
水洞草夫（法）、羽生祥（経）曲文琛（社）  
2年（4人）坂本遼（法）、安藤由都（法）、  
小久保剣（法）、工藤京平（経）

1年（7人）吉田和磨（法）、松橋凜太郎（法）、岩崎拓実（法）、福家一裕（法）、松澤萌（商）、田中亨（商）、鈴木由佳理（社）

宣伝活動も積極的に行い、よく頑張っていた。利益も3万円弱でたので大切に使つていきたい。

一橋祭2日目の11月5日、17時に部室に集合し、小樽食堂へ移動、宴会を行つた。今年も多くの現役部員及びOBの方々が参加し、非常に有意義な会があつた。特に1年生にとって、OBの方々との交流を通じて、かつての一橋山岳部がどのような部であつたかを知ることは非常に勉強になつたであろう。ただ、大きな会場の予約が取れず部屋が分かれてしまつたことは大きな反省点である。次期部長は私よりずっとしっかりとしているので、来年は大きな座敷で開催されるだろう。また、今年卒業された高橋さん、太田さんに参加していただけたことは非常に嬉しかつた。私も来年の3月で卒業するが、こういった場には積極的に参加していきたいと思う。部員はこれからもこのような機会を大切にしていてほしい。



## 2016年10月～12月 山行表

一橋大学山岳部

期 間							コ ー ス	メ ン バ ー
年	月	日	～	年	月	日		
2016	10	1	～	2016	10	2	朝日岳、白毛門山	山本
2016	10	2					鷹ノ巣山、六石山	大矢(CL)・有田(SL)・福家
2016	10	16					御前山、大岳山	内海(CL)・坂本(SL)・水洞・安藤・鈴木・松澤
2016	10	15	～	2016	10	16	鳳凰三山	大矢(CL)・有田(SL)・羽二生・福家
2016	11	13					金時山	曲(CL)・羽二生(SL)・小久保・吉田・福家・松橋・鈴木
2016	12	10					北横岳	内海(CL)・山本(SL)
2016	12	17					入笠山	上(CL)・内海(SL)・西山・工藤・松橋・福家・鈴木
2016	12	18					塔ノ岳・丹沢山	大矢(CL)・坂本(SL)・田中・吉田
2016	12	23	～	2016	12	25	燕岳	上(CL)・西山(SL)・内海・山本 OB : 前神・兵藤・佐藤(周)

## 燕岳山行記録（2016年冬合宿）

上 重衡（4年）

期 間 : 2016年12月23日～25日

参加者 : (学年は山行時)  
学生：上茂衡(4年CL)、西山祥紀(5年)、  
内海拓人(3年)、山本竜希(1年)  
OB：前神直樹(昭和51年卒)、兵藤元史  
(昭和52年卒)、佐藤周一(昭和54年卒)

### コースタイムと行動

12月23日 曇り時々雨

有明駅集合(10:30) — 宮城ゲート出発

(11:20) — 中房温泉着(14:30)

12月24日 曇り

5:40 中房温泉出発(5:40) — 第一ベンチ  
(6:25) — 第二ベンチ(6:25) — 合戦小屋  
(9:35) — 燕山荘(11:15) — 燕岳(12:10)  
— 燕山荘(12:40) — 合戦小屋(13:45) — 中  
房温泉着(15:50)

12月25日 晴れ  
中房温泉出発(8:10) — 宮城ゲート着  
(11:25)

**1日目 12月23日 曇り時々雨**  
前日から学生は部室に泊まり、国立5時30分発の鉄道で有明駅へと向かつた。この時期は青春18きっぷが使えるので交通費が安く済み助かつた。松本駅で前神さんと合流し、有明駅に向かつた。有明駅からは兵藤さんと佐藤さんに車で送つていただき、宮城ゲートに到着した。一息ついて登山計画書をポストに入れ出発した。兵藤さんは「ゆっくり行こう」とおっしゃつていたが、実際歩き始めるとペースが速く驚いた。最後の2、3キロがきつかつたが、約13キロの林道歩きは去年より楽に感じた。  
中房温泉に着くと、すでに2張のテントがあつた。私たちもテントを張つたのだが、ここで重大なミスに気付いた。ダンロップのテントの外張りが夏用だつたのである。中房温泉だったので問題はなかつたが、阿保などをしてしまつたと反省した。その後ペニカンを使つたキムチ鍋などはんの夕食を食べながら話し合いをした結果、装備の不安などを考慮して合戦小屋にテントを張るのをやめ、次の日に中房からピストンで燕岳に登ることになつた。合宿の初日は大体寝付けずに辛い思いをするのだが、この日も例外ではなかつた。寝袋の中で今更ではあるが自分はアウトドアに向いてないのではないかと思つながら時間

が過ぎるのを待っていた。

## 2日目 12月24日 曇り

起床してラーメンとともに一個ずつを食べて出発した。去年は第二ベンチあたりまでほとんど雪がなかつたが、今年は登り始めるところに雪が積もつていた。しかしトレースがついておりかなり登りやすかつた。第一ベンチくらいまでは楽々登つていたが、第三ベンチを過ぎたあたりから少し疲れてきて、早く合戦小屋に辿り着きたくてしようがなかつた。合戦小屋の少し手前からアイゼンをつけ、稜線へと向かうと燕岳の方向は青空で元気が出た。燕山荘に着いたときには雲に隠れていた槍ヶ岳が少し姿を見せ、後輩たちはカシヤカシャとたくさん写真を撮つていた。燕山荘の前で集合写真を撮つた後、一足先に下山する前神さん、兵藤さんと別れ燕岳へ向かつた。

頂上までの道では風が強く、かなり寒かつた。しかし、槍ヶ岳の上空は見事に晴れており、とても綺麗だった。頂上では後輩二人が楽しそうにしているのを見てこの合宿をやつてよかつたなとうれしい気持ちになつた。西山さんは装備をケチつたためにかなり寒そうにしていた。

その後急いで下山し、日が落ちる前に中房温泉に帰つてくることが出来た。この日は久

しぶりに先頭を歩いたため、ペースが速かつたり遅かつたりと乱れてしまつて本当に申し訳なかつた。その後、夜ごはんのシチューとパンを食べながら和気あいあいと楽しく過ごした。さすがに疲れていたので、この日はぐつ

ぱんを食べながら和気あいあいと楽しく過ごした。さすがに疲れていたので、この日はぐつ

すり眠れた。

## 3日目 12月25日 晴れ

6時くらいに起床し、朝飯を食べ、帰途についた。帰りの林道は凍つていてツルツルで皆何回も転んでいた。宮城ゲートに着いた後、OBの方々に焼肉をご馳走していただいた。久々においしい肉が食べられて本当に嬉しかつた。その後駅まで送つていただき解散となつた。学生はそのまま松本の銭湯に行つたあと、青春18きっぷを使って鈍行で帰つた。交通費が抑えられたのは良かったが、イルミネーションでも見てきたのか相模湖駅で大量のカツブルが乗車してきて、特急あづさで帰ればよかつたと少し後悔した。

## 総括

今回の合宿ではいろいろミスもあり、情けない山行であつたと反省している。それでも、部としては大きな経験になつたのでやつてよかったと思う。山岳部が復活してから冬山はほとんどやつてこなかつたが、冬山をやる気のある人も集まつてきたのでこれからはどんどんチャレンジしていく欲しい。

同行していただいた前神さん、兵藤さん、佐藤さんには計画の段階からいろいろご指導頂き、なんとか無事に終えることが出来ま



した。山行中にもいろいろと改善点を指摘していただき、大変参考になりました。本当にありがとうございました。

## 卒業生の進路

原 茂子	国土交通省
西山 祥紀	ニプロ(株)
上 重衡	JFE
辰川 貴大	総務省
有田 麻子	北海道新聞
大谷 紗子	みずほ銀行
岡田 嘉之	イギリス留学中(6月帰国予定)

## 式次第

1. 新年挨拶 (小島針葉樹会々長)
2. 乾杯挨拶 (佐藤・尾身会員)
3. スピーチ (尾身会員)
4. 学生の活動報告 (上 前年度部長、内海 今年度主将)
5. スピーチ (佐藤・尾身会員)
6. 懇親山行計画披露 (兵藤会員、山行幹事)
7. 中締め (前神針葉樹会副会長)
8. 山讚賦斎唱 (佐藤・力会員)

小島会長からは新年の挨拶および針葉樹会運営の目標について話があった。従来の目標と変わらないが、懇親山行・針葉樹会報の充実と一橋大学山岳部に対するきちんとした支援を挙げられた。

なお、小島会長からは、市川陽一会員(昭34卒)から3度目のご寄付(100万円)をいただき、会員の贊助会費の積み上げも含めてこれら目標に対しての財政的な裏付けも固められつつあるとの報告もあった。

## 会務報告

### 平成29年 新年会

開催日：2017年1月23日

場所：如水会館 記念室(東)

出席者：(内卒年)

佐藤・尾身(S31)、上原(S33)、仲田(S36)、竹中(S39)、小島・佐藤(力)(S40)、池知・佐藤(久)・原(S41)、

岡田・吉沢(S42)、中村(雅)(S43)、宮武(S45)、前神・藤本(S51)、兵藤(S52)、佐藤(周)(S54)、小宮山(H26)、町田(H27)、山崎(特別)、原(院1)、西山(5年)、上・辰川(4年)、内海・大矢(3年)、坂本(2年)

尾身会員からは、「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)」を主催されている近況のご報告と、特に若い人に対して、100年200年の長期的な視野に立って、地球環境の維持に貢献するような活動を行うよう、激励があつた。

一橋山岳会始まつて以来の山岳ガイドの資格を取得した佐藤(周)会員(S54卒)からはその苦労話が披露された。

出席した学生から、今年5月に卒業する学生の進路(就職先)等の紹介、今年度の一橋大学山岳部の体制(内海主将、坂本副主将)および山行計画が発表された。

兵藤山行幹事からは、5月末～6月初めに懇親山行で守門岳へ行くという予告があり、前神副会長から中締めとして楽しく安全に山登りをしようと呼びかけがあつた。

最後に佐藤(力)会員の指導により参加者全員で山讚賦を斎唱してお開きとなつた。

(岡田文責)

## 【訃報】

渋谷一郎さん(昭和28年卒)が平成29年2月7日、逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

## 会員消息

### ■2017年針葉樹会新年会案内に対する会員の近況報告抜粹

特別 鈴木羊三 元気で自医者をやつております。

特別 山崎孝寿 2016年は初めて針葉樹会の懇親（渾身？）山行に参加させていただきました。今後も参加できる機会がございましたらよろしくお願ひいたします。

昭23 大島理則 満90才で一切の公職からしりぞき、余生を過ごしております。針葉樹会も今後とも欠席させていただきます。恵しからずご了承ください。

昭33 新井慶司 83才となりました。元気で多忙な日々を送っております。

昭33 上原利夫 脚力回復の努力中です。

昭33 加地幸雄 今年の山行日数72になりました。大抵地元のユタの山ですが、アイダホやカリフォルニアにも遠征しました。

一昨日のユタの山は、日中の最高温度摂氏零下15度の寒さでした。かなり頻繁の山行のため訓練効果があつたのでしようか、休息中の血脉が一分間47に下がりました。

昭33 小林 博 大宮公園の諸設備を利用

して元気に励んでいます。

又毎月東山36峰の一、瓜生山の中腹にあり、信心している狸谷不動尊に尾根伝いにお参りに行っています。ここは室町時代に戦場となつた處で、為に山城の跡が各所にあり又間道が入り乱れてそれらのルートを辿るのも愉しみです。

昭34 沢木一夫 山仲間が皆彼岸に行つてしまい、余暇を持て余しています。といって、脚力は落ちるばかりだし……。

昭36 有賀 盈 会報136号の松本暮らしだとおり相変わらず元気に暮らしています。

昭36 小林正直 相変わらず車いす生活を送っています。

昭37 三井 博 体調不安定のため、リハビリに精を出しています。

昭38 白井 弘 年相応に元気にしています。

昭39 竹中 彰 先日のナンチクさんを語る会及び翌日の懇親山行（畦ヶ丸）では久し振りに多くの会員と共に楽しく呑み且つ

秋深まる尾根を歩くことが出来ました。相変わらず東京多摩支部の登山教室と「多摩百山」取材山行程度で髀肉之嘆をかこつていましたが夏に佐藤、本間兄と岳沢に向うことが出来たのがストレス解消に大いに役立ちました。

昭40 小野 肇 今冬の札幌は11月5日の21年ぶりの23センチの降雪で幕が開きました。さらに12月10日に44センチの降雪。積雪も65センチと記録的な雪降りです。

追い打ちをかけるように12月23日にはなんと60センチも降り、積雪量が96センチと平年の3倍になりました。おかげで除雪は25回もやりました。昨年は9回でしたのに。年あけてからはうそのようにおだやかで雪もチラチラです。今年は遅くまでスキーがやれそうです。

昭40 三森茂充 昨年来難聴がひどくなり、補聴器嫌いも重なつて多勢の集まりがしんどくなりました。

昭41 坂井溢弘 お陰様で元気です。

昭41 池知昭洋 皆さん、畦が丸では助けて頂きありがとうございました。お陰で体裁など吹っ飛んで必死で歩くことができました。2016年の山行は4回でした。

昭41 高崎俊平 9月に「悪性リンパ腫」を発症、入院治療を続けています。山も遠く

になつてしましました。早い復帰を期待しておりますがどうなりますか？

昭 43 中村雅明 キリマンジャロを登頂出来たので、海外トレッキング＆登山は卒業です。国内山行は来年も縦走を中心にして行きます。来年5／31から17日間、スペイン『巡礼の道』サイクリングを予定しています。

蛭川さんと一緒に釧路川カヌーも計画しています。蛭川さんは山以外でも多忙です。

昭 44 藤原朋信 糖尿病は薬と運動と食事管理でだいぶ改善しましたが、あと数年アウトドア、続けるためにも、健康管理は緩めずに行きたいと思っています（昨年半ばから一切の、宴席欠席しております）。

昭 46 金子晴彦 矢掛への移住促進のための一般社団法人を立ち上げてしまい、やたらに忙しくなってきました。最後のご奉公です。今年こそは剣と思っていますがどうなることやら。

昭 51 前神直樹 サラリーマン生活ゴールまで第四コーナーを回つて最後の直線に来ています。山三昧の生活までもう少しだと思つて頑張っております。

昭 54 佐藤周一 （公社）日本山岳ガイド協会の「登山ガイド・ステージI」に本年10月に合格し、来年4月より東京都墨田区の実家に拠点を置き、ガイド業務を開始します。

す。詳細は後日、HPを立ち上げますので、ご覧ください。

昭 59 稲毛尚之 職場からは六甲山の山並みが眺められ、至近の菊水山は500mにも満たない高さですが、それでも四季の移ろいを感じております。

（birddiet-okada36@jcom.zaq.ne.jp）までご連絡ください。それぞれの世話役さんに引き継ぎます。

## 三月会通信

●2017年2月20日開催 三月会記録

【出席者】佐難、小島、佐藤（久）、中村（雅）、

宮武、佐藤（周）、岡田（記録）

（学生）上、辰川、有田（以上4年）

▽5月、6月、7月と日程が立て込んでいる。まず、

6月6日（火）18:30～幹事会

7月10日（月）総会

をファイックスする。

▽今年1回目の懇親山行は6月3、4日に守

門岳にて実施が決定。幹事は兵藤さん（昭52）、地元幹事として加藤さん（昭51）および太田さん（平28）がお世話をされます。

近く計画書が出ますので、奮つて参加しましょう。

▽そのほかにも、芦安・高谷山周回登山（5月20～21日）、三四郎会（6月8～9日

谷川岳周辺）、飯豊山（時期未定）、北海道（7月）など山行計画が目白押しです。本稿

を読まれてご興味のある方は、岡田（birddiet-okada36@jcom.zaq.ne.jp）までご連絡ください。それぞれの世話役さんに引き継ぎます。

▽4年生の上（JFE）、辰川（総務省）、有

田（北海道新聞）が出席。みなさん、希望に満ち溢れて日々すごされているようで、その若さに大いに刺激を受けました。

近年、会員に公務員が多くなっていますが、アメリカの役人は“public servant”意識が結構強く、日本では“お上”意識が強い、というアメリカ生活の長かつた長老の話をどのように理解されたでしようか？

▽如水会では米寿・喜寿のお祝いをしています（如水会々報12月号参照）。2016年11月14日（如水会創立記念日）に記念品

が贈られたようです。

針葉樹会員では、南（昭28卒）、瀬田（昭31卒）各氏が米寿、中橋（昭39卒）、三森（昭40卒）、小野（昭40卒）各氏が喜寿のお祝いの対象にあがつておりました。

●山行報告

名 前	日 に ち	山・コ ー ス	記 事
岡田 健志	1月 17 日	吾妻山 (JR二宮駅そば)	満開の菜の花と富士山
宮武 幸久	2月 18~19 日	雲取山	
中村 雅明	1月 6 日	成東「関東ふれあいの道」	藤原さん、家内と
	2月 6 日	蓬田岳 (阿武隈山地)	藤原さんと 下新田から蓬田新田登山道
	2月 7 日	高湯温泉周辺スノーシュー	降雪の為、一切経山断念
	2月 13~15 日	赤城山スノーシュー	家内と 大沼湖畔青木別館に2泊
佐薙 恭	1月 6 日	大山~三ノ塔~大倉	単独
	1月 25 日	弘法山~蓑毛越え~下社	単独 大山南稜伐採工事のため大山 登頂できず
	2月 13 日	丹沢白山、順礼峠、日向薬師	鈴木、松尾 (オーション会ハイク)
佐藤 周一	1月 29 日	乗鞍スキーリゾート	上部にて雪崩救助訓練
	2月 3 日	軽井沢プリンスホテルスキー場	ゲレンデスキー
	2月 11 日	黒斑山 (浅間山の外輪山)	
	2月 12 日	木曽駒ヶ岳	ホワイトアウトで敗退
	2月 13 日	丸沼高原	ゲレンデスキー
	2月 15 日	高尾山	
佐藤 久尚	2月 11 日	筑波山	元の会社の仲間と

●山行計画

名 前	日 に ち	山・コ ー ス	記 事
岡田 健志	3月末	八ヶ岳	
	4月末~GW	遠見尾根から五竜岳	
中村 雅明	4月 12~19 日	河西回廊ウォーキング	家内、家内妹夫婦と 「シルクロード雑学大学」ツアーハイク
佐薙 恭		山本本「トレーニング学」のリコ メンドに従いこれから月2回の 山行を目指す	
佐藤 周一	2月 25 日	安達太良山 (山スキー)	前神、兵藤、齋藤、佐藤の4名で学生 に同行
	2月 26 日	上州武尊山	
	3月 12 日	輝山 (山スキー)	松本の山岳会イベント
	3月 18~19 日	木曽駒ヶ岳	ガイド仲間2名と

(文責: 岡田健志)

原稿募集 1

『私の思い出の一葉』の原稿を募集しています。

400字くらいの説明文をつけて写真 (スケッチも可) と共にお送りください。

送付先 針葉樹会報担当 岡田 健志

〒248-0022 鎌倉市常盤 937-53

メールアドレス birdiet-okada36@jcom.zaq.ne.jp

原稿募集 2

針葉樹会報用の原稿を募集しています。

写真をつけていただければなお有難いです。

送付先 針葉樹会報担当 岡田 健志

〒248-0022 鎌倉市常盤 937-53

メールアドレス birdiet-okada36@jcom.zaq.ne.jp

▼ 今年は七名の方が卒業しました（うち一名はイギリス留学中のため留年）。新しい仕事環境や生活環境に一日も早く慣れて活躍してほしいと願います。

新しい会員が増えることは、会にとつて大変喜ばしいことです。忙しい毎日が続くこととなるでしょうが、そんな中につても、一瞬でもいいので、山岳部生活を思い出し、山岳部仲間との付き合いも継続して下さい。

一橋山岳部は1922年（大正11年）6月21日に発会式をもち、現在の針葉樹会のメンバーは、古くは1947年（昭和22年）ご卒業の先輩から、実に70年にわたる卒業生が構成しています。この歴史を次の50年、100年につないでいって欲しいものです。（岡田）

地元の人ほどどこにタラノキがあるか知つていて採るタイミングを待つていますが、その前に「余所者」が取つていってしまったり、二番子・三番子までもぎ取つてしまふ奴がいるから、「どうしようもねえだ」とこぼしているから、「敷地に生えてるタラの芽を盗られた」とか「所沢ナンバーのクルマには気をつけろ」とかの話をよく聞きます。山菜も「ブームになると、おおらかな人情や季節感が消えていくようです。

（井草）

▼ 奥多摩にもいよいよ山菜の季節がやつてきました。私が毎日のように行つている鳩ノ巣の定食屋「大橋屋」でも、常連客が採つてきた山菜の天ぷらやおひたしが酒のつまみにちよくちよく出るようになつてきました。まづ登場するのがフキノトウで、つづいてニワトコ、コゴミやシドケなどがきて、ゴールデンウイーク頃には定番のタラの芽です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっていますので、その資金手当てのためにも、賛助会費へのご協力をお願い申し上げます。

#### ◎会費納入先

三菱東京UFJ銀行 赤坂支店  
口座名 針葉樹会  
口座番号 普通4825647

\*振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入してください。

会計幹事 佐藤久尚

#### ■会費納入のお願い

平成28年度（28年6月～29年5月）の会費納入をお願いいたします。

会費（普通会費）は卒業年次に関係なく、一律5000円です。（ただし、昭和29年度以前卒業の会員は従来通り会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず賛助会費を募集しております。賛助会費は一口1000円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳

部への支援強化の必要性が高まっていますので、その資金手当ての

ためにも、賛助会費へのご協力を